

主日礼拝式文試用版

式文ハンドブック  
『主日礼拝式文』・『御言葉の礼拝』

日本福音ルーテル教会式文委員会

## 目 次

1. 礼 拝	1
2. 4つのパート	
招  き	4
みことば	6
聖  餐	9
派  遣	1 2
3. 御言葉の礼拝	1 5
4. 教会暦・典礼色	1 8
5. 聖書日課	2 4
6. 式文の曲について	2 7
7. 司式と礼拝堂の使い方	2 9
8. 信徒の礼拝奉仕	3 2
9. 寄稿「なぜ式文を改定するのか」	3 5

## 礼 拝

### I ルター派の礼拝

「教会は、聖徒の会衆であって、そこで福音が純粹に教えられ聖礼典が福音に従って 正しく執行せられるのである。」（アウグスブルグ信仰告白第7条）

教会とは集められた聖なる人々です。言い換えるなら、教会とは、見えるしるしである御言葉・洗礼・聖餐という3つの中心へと招かれた人々の群れ、それが教会なのです。

ルターは神が与えることと、私たちが行うことを明確に区別し、しかもなお、その二つを同時に持ち続けようとしていました。初期ルター派の典礼形成に最も影響を及ぼした典礼に関する2つの文章は、ルター自身の強い関心事を示しています。「ヴィッテンベルグ教会のためのミサと聖餐の規範」*Formula missae et communionis pro ecclesia Wittenbergensi* (1523) と「ドイツミサ」*Deutsche Messe* (1526) において、ルターはキリスト教の伝統をどのように福音的に変革し、用いることができるかを示しました。言い換えるなら、ルターにとって、福音的实践である会衆の典礼というものはカトリックの歴史的伝統から離れては存在せず、「ルター派独自の典礼」、即ち、全く「新しい典礼」というものはなかったのです。

ルター派の人々は「ミサを保持する」（アウグスブルグ信仰告白第24条）と告白し、ミサと聖書日課を保持しただけでなく、御言葉と聖礼典の実施、そして、ルター派の人々が「教会のしるし」と呼んだ全てのことを保持しました。しかし同時に、ルターは厳しい批判をも与えました。母国語の使用、ミサへの信徒の参加と二種陪餐、また会衆参加の讚美歌を奨励しました。ルターの関心は古くて伝統的なミサを、神の言葉が明確に聞こえる場とすることにありました。礼拝における御言葉と会衆参加の重要性はルター派が現在に至るまで持ち続けてきた中心的テーマであると言えます。そして、この二つのテーマは讚美歌による会衆賛美へとルター派を駆り立てました。更に強調したことは「改革は強いられない。」でした。ルターは、変化は強いられるのではなく、愛し、教えることによってもたらせられなければならないと説教しました。強制に対する強い批判と同時に、愛し教えることによる改革への招きは、ルター派の伝統として保持され続けてきました。

更に、ルターが示してきたことが犠牲への批判でした。ルターにとって、御言葉と聖礼典によって神からの恵みを受け取ることは、キリストによって、飢えや困窮の中にある隣人へとキリスト者を向かわせることを意味しました。礼拝における捧げものは犠牲として捧げられるのではなく、それを必要とする隣人のために、集められるようにすべきである。「あなたがこの sacrament に参加した時、・・・あなたは愛の中にあることが必要です。あなたはそのことに悲しみを感ずる必要があるのです。世界は罪なき者の不当な苦しみに満たされています。あなたは戦い、働き、祈り、もしあなたがそれ以上できないのなら、あなたは心からの憐みの情を持たねばなりません。」

ルターによるミサは神の恵みによって私たちに創り変え、その神の恵みを隣人にもたらし、分かち合うべき宣教へと私たちを導くのです。そして、この恵みを受け取る手段こそ、礼拝における3つの中心と言われる御言葉・洗礼・聖餐であり、この3つを中心に持つ礼

拝がルター派の礼拝なのです。

## II 改定式文の構造

紀元2世紀、教父ユスティノスが記した第1弁明は、20世紀にどのように礼拝を新たに改革してゆくべきかを考える重要な基盤となりました。

「この儀式（洗礼）が済んだ後もさらに、私達はたえず前述の記念の式（洗礼）を互いに覚えます。そしてもてる者は窮するすべての者のために扶助し、何時も協力し合って生活しているのです。・・太陽の日と呼ぶ日曜日には、町ごとに村ごとの住民すべてが一つ所に集い、使徒達の回想録か預言者の書が時間のゆるす限り朗読されます。司式者は説教において勧め、これら善きパターンの中へと私達を招きます。・・それから一同は起立し祈りを捧げます。・・パンと葡萄酒と水が運ばれ、司式者は祈りと感謝を捧げ・・一人一人が感謝された食物の分配を受け、これに与ります。また、欠席者には執事によって届けられるのです。・・・」

（キリスト教教父著作集I ユスティノス「第一弁明」6、7P85）

この記録は日曜日の集まりでキリスト者たちが行うことのアウトラインを与えます。それは私たちが今も知っており、実践していることです。この構造はキリスト教が時を超え続けている驚くべき連続性を示しています。しかも、この連続性はユスティノス以前のキリスト教徒との連続性でもあるのです。ルカによる福音書24章は週の初めの日である日曜日、エマオへの途上、復活した主と出会う弟子について語っています。この物語は当時のキリスト者たちが日曜日の彼らの集まりを、このような仕方で保持するように励ましていると考えられています。弟子たちは集まり、新来者を迎え、御言葉と説教を聞き、主の体と血に与り、主の死と復活の証言者として遣わされます。即ち、24章の要約はこうなります。招き・御言葉・聖餐・派遣。

そして、20世紀に始まった礼拝改革を私たちの言葉で言い表すならば、式文改定とは私たち自身の主日礼拝を聖書に始まる連続性の中で、再び吟味してゆく働きであると言えます。ユスティノスが記録した日曜の集会は全員参加で行われます。洗礼を覚え、集まります。共に祈ります。パンとブドウ酒を食べ飲みます。礼拝に欠席した人のもとへパンとブドウ酒を届けます。貧しい人々のために集め、隣人のもとへ遣わされます。会衆に奉仕する人々がいます。礼拝奉仕者と呼ばれる人たちです。聖書朗読者、配餐補佐、また欠席者にパンとブドウ酒を届ける人がいます。とりなしの祈りを祈る人がいるかもしれません。そして、一人の司式者がいます。しかし、礼拝は共同のもので、そのすべてを聖職者一人で行いません。教会とは集められた聖なる人々です。そして、集まった人々が行うことの中に、それと共に、その下で三位一体の神が働かれます。福音を聞く時、私達の心は「燃える」のです。イエスの御名において私たちが祈る時、キリストは私たちと共におられ、神は聖なる聖餐に臨在し、生きて働かれます。最も重要な行為者は神御自身であり、私たちはこの神から恵みを頂きます。即ち、これが御言葉と聖礼典—御言葉と洗礼と聖餐—という神の恵みを受け取る手段を中心に持つ礼拝です。そして、これがアウグスブルグ信仰告白の第7条に書かれていることであり、聖書から続いているのです。ルター、そしてパ

ウロ以来、教会は礼拝を改革し続けてきました。それは過去への批判ではなく、イエス・キリストの福音が御言葉と sacrament（洗礼・聖餐）において、今日の私たちにとってより明確であり得るかを問い続けることです。

改定式文は聖書に深い錨をおろし、初代教会が実践していた神の恵みを受け取る礼拝、即ち、【招き】・【みことば】・【聖餐】・【派遣】という4つのパートで作られています。

- 1) **【招き】** 神によって招かれ、集まります。ルター派にとって罪の告白と赦しは洗礼想起であり、共同体としての告白がなされます。「つどいの祈り」はその主日の主題となります。
- 2) **【みことば】** 旧約の応答として詩編を歌います。「聖書朗読」・「説教」に続き、応答としての賛美と「教会の祈り」があります。そして、【みことば】の最後に、【みことば】と【聖餐】を結び付ける「平和の挨拶」が行われます。
- 3) **【聖餐】** 犠牲としてのキリストではなく、キリストの体である一つのパンを分かち合い、配餐後に「シメオンの賛歌」を歌います。神の家族・隣人との交わりへと私たちを導きます。
- 4) **【派遣】** 神の恵みを受け取った聖餐への応答として、捧げものを携え、私たちは隣人のもとへ神によって遣わされます。

(平岡仁子)

## 招 き

### ○概観

「私に従ってきなさい」、このイエスの招きに応じて、漁師たちはイエスの弟子となりました。信仰者の始まりであります、これは時代を越えて全てのキリスト者の始まりでもあります。礼拝もまた、神の招きがありそれに応えることによって始まります。これまでの式文は始まりを「開会」と表現してきましたが、「開会」とは状態を示す言葉であると理解できます。今回の改訂式文では、状態を示す「○○の部」という区切りを外しました。礼拝はひとつひとつが独立しているのではなく全体が連動しており、全体がひとつになって礼拝式であるということを強調するために、「○○の部」という状態ではなく式文の背後にある意味を表すことを意識してきました。その上で、「始まり」は何かを検討してきました。

「始まり」の重要な要素に「罪の告白＝懺悔」があります。歴史的に「懺悔」は礼拝外に置かれてきましたし、ルターも『ドイツ・ミサ』において取り上げていません。(ローマ式ミサにおいて、入祭唱(礼拝の始まり)の前にざんげが私的に祈るか唱えられた形跡がありますが、式文中にざんげを取り入れたものはメランヒトンによる1552年のものが最初と思われます。)当時のローマ式ミサにおいて懺悔は準備行為としてミサを司る者たちのみによって私的になされており、ミサそのものに含まれていなかったもので、ルターは言及しなかったのです。(聖餐前の罪の告白の起源は9世紀頃とされています。)

また sacrament には目に見えるしるしが不可欠であるという理解から、「悔い改め」は sacrament から除かれましたが、赦免のための sacrament の位置を与えなかっただけであって、神によって命ぜられたものという理解は変わりません。ルター自身が「キリスト者の一生は心を入れ替え、自己の罪を憎むものである」と言っているように、悔い改めが大切なことは言うまでもありません。

悔い改めに私たちが導かれるのは、聖霊の働きによってです。アウグスブルク信仰告白第17条に「人間は、聖霊の恵みや助力、その働きによらないで、神に受け入れられ、心から神を畏れ、信じ、また心の中から生来の悪い欲望を取り除くことはできない。むしろそのようなことは、神のみことばを通して与えられる聖霊によって起こるのである」とあることから、「聖霊によって悔い改めへと導かれる」と理解できます。ですから、礼拝に集うそのこと自体が神の招きであり、悔い改めへと導かれている出来事といえます。

また、礼拝の始まりをアメリカでは「Gather」と表現されていますが、「集い、共に集う」では状態が強調されているだけのように感じられます。むしろ前述のように「神の招き」によって礼拝に集っていることを覚えて、礼拝の始まりを【招き】としました。

### ○実際の取り扱い

「罪の告白」の言葉については、信仰と職制委員会より答申された検討の課題(2006年6月10日付)を中心に議論しました。答申では罪の告白のことばについて、特に「生まれながら」と「けがれ」という言葉への検討課題が出されていました。「①この式文の表現を改めることを積極的に勧めるのか。それとも、これを別の表現に代えることも可というにとどめるか。②代えるとするならば、「けがれにみち」を取るということだけでよいのか、それとも、もう少し別の表現を提案するのか。③具体的には、さらに差別の問題について教会的な理解を深めていく取り組みを促すということも大事ではないか」というものでした。当初、式文委員会では「①および②に示された、式文文案についての検討とすることが求められると考えられる。③については、より広範な教会の取り組みとして各個教会、および必要に応じて別の委員会(「信仰と職制委員会」「社会委員会」など)で取り上げ検討されることがふさわしい。」

と方針を立てました。議論を重ねる中で、「東日本大震災」と「原発事故」に遭遇し、私たちの有り様を具体的に表現することを痛感し「無関心」「怠り」という言葉を選択し、「生まれながら」と「けがれ」については表現しないこととしました。

その一方、礼拝の始まりに、招かれたことの応答としての洗礼と日々の「思いと言葉、行い」を想起することを大切な要素としました。洗礼はみことばと水によって私たちを洗い、キリストと一つに結ばれた私たちを教会の群れの中へと招きいれます。ルターは大教理問答書において、洗礼の想起と回帰の必要性について述べています。「だから洗礼は永続的なものである。それで、たとい洗礼から脱落し、罪を犯すものがあったとしても、なお私たちにはこれに戻る道が常にあり、古い人を再び克服することができる、しかし繰り返し水を注がれる必要はない。よしんば百回の水の中にしずめられようとも、結局それは1度の洗礼以上のものにはならないからであり、有効と意義は存続し続ける。だから悔い改めとは洗礼に立ち返ることに他ならず、始めたけれど放棄したことを再び、実践することである。」

礼拝への【招き】は全ての人に、即ち洗礼の有無、信仰生活の長短に関わらず与えられています。しかし神の招きに対する私たちの応答は「洗礼」という具体的な出来事に繋がっています。ですから礼拝における【招き】への応答は先ず「洗礼の想起」として私たちに現れ、そこから「礼拝への出席、罪の告白、赦しの求め、福音に与る」等の行いへと繋がっていくと理解できます。全ての人が洗礼に、そして礼拝に招かれていることに感謝しつつ、礼拝が始められるよう願うものです。

キリエに関しては、431年以前に定型化されていたクリュソストモス典礼の連祷の一部に3唱のものがああります。6唱のものは、東方教会の古くからの祈りであり、嘆願の意向の回数だけ会衆が「キリエ・エレイソン」と繰り返しました。5世紀にはかなり長い祈願が行われていたので、ミサの短縮としてこの祈願の形がとり入れられました。神の助けを求める祈りであると同時に、執り成しの祈願です。

グロリアは教会の典礼文に入れられたのは6世紀とされています。当初は降誕祭礼拝における司祭に限られたものでありましたが、後に復活祭に限り一般司祭も使用できるようになり、更に常用化されるようになりました。グロリアに答唱句「アーメン」が続くのは、司教・司祭などによるグロリア唱に対する答唱の名残が残っているものですから、参列者で唱和するので省きました。

「特別の祈り」は「つどいの祈り」としました。これまでと同じく、その日の礼拝全体の主題を明らかにするという意味は変わりませんが、「招かれ集められた」ことの意味を含む言葉に変更したものです。また、「つどいの祈り」は【招き】と【みことば】を繋ぐ架け橋ともなっています。

(中島康文)

## みことば

### ○概観

神の【招き】に応じて集う者に与えられるのが「みことば」です。神が、聖書を通して語りかけるみことばを聞きます。それは聖書そのものの言葉と、その福音を告げる「説教」とが中心となります。私たちは、常に神の言葉を聞く必要がある存在であり、それを聞き、それに与ることなしに、福音による義（赦し）を受け取る信仰は生まれません。「みことば」なしに礼拝そのものは成立しません。

主日の礼拝を具体的に記録した最古のものと言われるユスティノス(2世紀前半)の「第一弁証論」はこう記します。「太陽の日と呼ぶ曜日には、…一つところに集まり、使徒達の回想録か預言者の書が時間のゆるす限り朗読されます。朗読者がそれを終えると、指導者が、これらの善き教えにならうべく警告と勧めの言葉を語るのです。…一同起立し、祈りを献げます。そしてこの祈りがすむと…パンとブドウ酒と水とが運ばれ、指導者は同じく力の限り祈りと感謝を献げるのです。…会衆はアーメンと言って唱和し、一人一人が感謝された食物の分配を受け、これに与ります」。改定式文の【みことば】と次の【聖餐】の繋がりは、これを基礎にしています。

そのため、この改定では現行式文との変更はごく一部です。「つどいの祈り」(かつての「特別の祈り」)が、その礼拝全体の主題を明らかにするという意味で、直前の【招き】の最後に移行し、これが、【招き】と【みことば】を繋げる性格と意味合いを持つこととなります。

「信仰告白」の後に、かつての「派遣の部」にあった「教会の祈り(とりなしの祈り)」が置かれました。上記ユスティノスの伝統の回復と、もう一つは、現在、しばしば起こる奉獻の祈りとの混同を避ける意図です。そして、「平和の挨拶」が続きます。この平和の挨拶は、パウロが言う「聖なる口づけ」(I コリ 16:20, II コリ 13:12, ロマ 16:16)が、その後の会食(聖餐)に与る前の「和解の挨拶」だったと思われることから、「聖餐」の中ではなく、そこに移行する直前としたものです。つまり、ここも【みことば】と【聖餐】を繋ぐものと位置付けられるものとなります。

三つの聖書朗読と、そこでの「聖書日課」は、改訂共通日課(RCL)の使用を前提としていますが、現行の聖書日課(共通日課=CLを日本のルーテル教会が小改訂したもの)を排除するものではありません。改定式文では、「詩編」を取り入れる試みを提案します。現行の式文にも「詩編」を用いる可能性は幾つか示唆されていましたが、ここでは、第一朗読後に旧約日課の続き(応答)として置くこと、あるいは、かつての昇階唱(グラジュアル)として、福音書朗読前に用いること等の可能性を示して、礼拝の素晴らしい伝統である詩編を用います。単なる朗読ではなく、交読や交唱、歌唱や詩編歌(讚美歌)等、様々な工夫が求められます。

### ○実際の取り扱い

司式：みことばを聞きましょう



「みことば」を聴くことを司式者が会衆に呼びかける文言が入りました。

#### [第一の朗読]

日課の第一朗読の箇所がここで読まれます。

#### ・ 応答唱

その日の詩編（または指定の箇所）を、朗読、交読、交唱します。または、ふさわしい讃美歌を用いてもかまいません。ここで詩編を用いない場合は、福音書朗読前の賛歌や、説教後のみことばの歌に代えてもよいでしょう。

詩編唱の典礼曲も提案されており、その場合は、ふさわしいシラブルのある「詩編」を作成し用いてもよいでしょう。

(※) 詩編に続いて「栄唱（グロリア・パトリ）」を続ける習慣があり、改定案でもここに記載がありますが、日課の応答としては用いません。

#### [第二の朗読]

日課の第二朗読の箇所が読まれます。

朗読に引き続き、讃歌（ハレルヤ唱）、四旬節にはキリスト詠唱が用いられる。「詩編」ここで用いた場合は、詩編に続けて讃歌か詠唱が用いられてもよいでしょう（上記参照）。

#### [福音書の朗読]

日課の福音書の箇所が朗読されます。

朗読者の告知の後に、伝統的な挨拶「栄光は主に」が交わされます。福音書朗読後は、「賛美はキリストに」と応答します。

伝統的に、福音書朗読は、起立して聴くならわしがあります。「挨拶」と共に起立し、応答の後に着席します。

#### [説教]

福音書朗読に続き、すぐに説教がなされます。これは、みことばの朗読とその説き<sup>あかし</sup>証である説教の一体性と一貫性を示します。もちろん、説教が必ずしも福音書をテキストとしないう場合もありますが、その場合でも、当日の「福音の言葉」として聞かれるものです。また、従来朗読後に置かれた讃美歌の間に、司式者（説教者）の朗読台から説教壇への移動がなされましたが、むしろ説教壇で福音書朗読を行う等の工夫も考慮されてよいでしょう。

#### [みことばの歌]

その日の聖書箇所のテーマとなる歌、みことばへの応答、感謝、告白等ふさわしいもの、あるいは前述の詩編歌が用いられても構いません。ここに讃美歌を置くのは、現行式文「感謝の歌」を踏襲したものです。礼拝への会衆の参与として重要な部分です。

#### [信仰告白]

ニケヤ信条、使徒信条、あるいは相応しいものが用いられます。キリスト教会の公的な「信仰告白」として、ニケヤ信条、使徒信条、アタナシウス信条と並び、ルーテル教会はそれ以外に宗教改革期に出された独自の信条を持っています。ニケヤ信条は、325年のニケヤ公会議のものに、381年コンスタンチノポリス、589年トレドの両公会議の加筆を含めたもので、キリスト論が中核となっています。使徒信条は、2世紀頃の古ローマ信条（洗礼と結び付い

ていた?)を原型として、8世紀頃標準化されていて、三位一体論が軸となっています。アタナシウス信条は、前半が三位一体論、後半がキリスト論を軸とする詩形式で、5世紀前期の信条です。本来礼拝の定式ではなく、必要に応じて公同の告白としてなされたものですが、11世紀ごろから礼拝に取り入れられました。

典礼の中では、一般的に信仰告白といえばニケヤ信条でしたが、ルターの教理教育で重んじられた使徒信条を用いる習慣がルーテル教会で生まれました。信仰告白は、その成立の事情から、信仰の立場を明確にするために必要に応じてなされたものですから、教会の共同体が共通に認め、表明する信条を用いることもあり得ます(例えば「宣教百年」宣言等)。

ただし、礼拝の公同性において、この告白は、共同体の信仰を表明し、また相互に確認していくものですから、一般的には「ニケヤ信条」「使徒信条」が用いられます。

また、式文委員会としては、「ニケヤ信条」に関しては、主語を「私たち」とする試みも一つの可能性として提案したいと思います。もともと告白された当初は複数形(ギリシャ語)だったものが、ラテン語の礼拝(ミサ)に単数で組み込まれて伝統となりました。今日では、その公同性の観点から複数形で唱えることが、欧米教会を中心に回復されて来ているためです。今後、教会の中で議論が行われていくことを期待します。

#### [教会の祈り]

準備された祈り、自由祈祷でも成文祈祷でも、公同の執り成しの祈りがなされます。式文で提案されているような会衆の参与、応答が積極的になされることが望ましい部分です。

#### [平和の挨拶]

「聖餐」に入る、橋渡しの挨拶です。「互いに挨拶を交わす」ことが勧められています。各教会の習慣や、会衆の規模等でさまざまな工夫がなされることが望ましい部分です。

(松本義宣)

#### \*小栄唱(グロリア・パトリ)について

「栄唱」は、典礼歌グロリアに対して「小栄唱」とも呼ばれるものです。ラテン語の歌い出し「グロリア・パトリ(父の栄光)」とも呼ばれ、7世紀シリアに起源があると言われ、伝統的に聖務日課(時祷)における詩編の頌歌(ドクソロジー)として付け加えられていたものです。五巻に分けられた詩編の各巻最後の詩編の末尾(41:14, 72:19, 89:53, 106:48 参照)に付け加えられたユダヤ教の頌歌に倣ったものと考えられます。ローマ・カトリックのミサでは、入祭詩編(イントロイトゥス)では末尾に用いられました。宗教改革後の礼拝式では、この部分は、栄唱を伴った詩編歌に置き換えられました。しかし、徐々に開会の歌(コラール等)が用いられるようになり、詩編は廃れていきますが、用いる際には栄唱が末尾に置かれる習慣は残りました。19世紀以降、開会部に詩編が回復され、詩編に続いて会衆による栄唱が習慣化します。詩編に応答する「三位一体告白歌」の性格を獲得していきました。この詩編は、第一日課への答唱詩編の位置づけであり、伝統的には、そこに第二朗読後の「賛歌」「詠歌」が続くのが伝統でした。それが整えられた詩編歌グラジュアル(昇階唱)の起源です。入祭詩編として、あるいは昇階唱、みことばの歌として用いる場合は、詩編に続く本来の栄唱(会衆の応答)として用いる伝統から用いられても構わないと思われます。

## 聖 餐

### ○概観

私たちは神の憐みの言葉を聞くだけではありません。私たちはまた、神の憐みを食べ、飲むのです。このイエス・キリストの体と血による聖餐はまるで見える、そして食べられる御言葉のようです。私たちは食事のパンを求め、両手を差し出し、愛をもってこの世にこられる神の全き御臨在を私たちの体の中に受け取ります。聖餐とは繰り返し行われる入信儀礼の一部として理解されます。洗礼は生涯に一度だけですが、洗礼で受けた恵みを私たちは毎週の礼拝において、繰り返し受け取るのです。

「この礼典が新しい人を養い強める魂の食物だというのは適切である。洗礼によって私たちはまず新たに生まれるのであるが、それにもかかわらず、すでに述べたように、なお人間には肉と血において、古いものが並び存している。・ ・ ・ 私たちはしばしば疲れはて、時にはつまずくことさえある。それで信仰が回復し、強められて、このような戦いのさなかにあって転落することなく、ますます強さを加えられるようにと礼典は日ごとの食物としてあたえられるのである。」

(ルター著作集第1集8、532頁)

聖餐に与ることができるのは、聖書の教えを真理と信じ、罪の赦しのための洗礼を父と子と聖霊の御名によって授けられた人であり、洗礼は聖餐へと私たちを導きます。

16世紀初めのルター派は「私たちのあいだではミサは毎主日と他の祝日に行われていて、・ ・ ・」(アウグスブルグ信仰告白弁証 第24条1)と告白しており、キリストの賜物である食事は、毎日曜日と祝日におけるキリスト教礼拝に絶対不可欠な【みことば】と並ぶ、もう一つの重要な中心と考えられてきました。私たちは聖書が語る福音を理解するために、【みことば】の次にこの食事を必要とするのです。

改定式文の流れはこのことを示し、「奉獻」をこの二つ(【みことば】と【聖餐】)の間におくことを避けました。「奉獻」は私たち人間が神様に捧げる行為を示し、人間の神様に対する業という方向性を強く示す言葉です。実際、ルターが礼拝順序を書いた『ラテン・ミサ』、『ドイツ・ミサ』いずれにも、ルターは「奉獻」あるいは「献金」を含めませんでした。そもそも、礼拝の歴史において「奉獻」は独立した一つの構成要素としてあるのではなく、聖餐に組み込まれていました。捧げられたパンとぶどう酒が聖餐に用いられたということもありましたが、中世において聖餐そのものが神様に繰り返し捧げられるキリストの犠牲・奉獻と考えられてきたことがその理由です。ルターは、その中世の聖餐理解を百八十度ひっくり返し、聖餐は人間が神にささげる行為ではなく、神様の恵みの業として理解しました。ですから、改定式文では聖餐の中に奉獻を加えません。改定式文は礼拝を、神様の人間に対する奉仕の業と理解するルター派の信仰に基づき、説教と聖餐の一貫性を大切にしました。そして、「奉獻」を「感謝のささげもの」と呼び、「派遣」の中に置きました。

また、「平和の挨拶」を最初に置かれていた位置に戻しました。「主の祈り」後ではなく、「教会の祈り」の後、【聖餐】の直前に。テルトリアヌスが「祈りの封印」と呼んだように、

「平和の挨拶」は「教会の祈り」に続き、祈りを閉じるかのように実践されてきたからです。

#### ○実際の取り扱い

##### ・文言の変更箇所

##### 1) 「序詞」: 「心を高くあげて、主をおおぎましょう」

「心を高くあげる」とは心が鈍い私たち自身を、時には神様に心が十分向いていないような自分をありのまま神様に向けてゆくような意味合いを込めています。聖餐の恵みに与るとは、私たちの信仰的理解や準備によるのではなく、神様がそのような私たちを捕らえ、恵みに与らせてくださることを覚えます。

##### 2) 設定

「苦しみを受ける前日」から「渡される夜」へ

ルターの『ドイツミサ』にある設定辞の言葉、I コリント 11 章 23 節の文言へ。

##### 3) シメオンの賛歌

・「異邦人の心を開く光」の「異邦人」を「諸国民」（すべての人）に変更しました。異邦人という言葉は日常的に使われないので現代の人々にイメージし易い言葉にしましたが、検討を継続します。また、「イスラエル」は新約聖書において神の民の象徴的な意味を持ちます。

必要ならば、説明を付けることが良いでしょう。

・聖餐の歌が歌われる中、司式者は聖卓の準備をします。聖卓は食卓です。聖餐の始まりに食卓を用意します。聖卓の近くに準備用の台を設けると良いでしょう。

・聖卓は聖餐の時以外はいらず、司式者が聖卓の背後に立つのは聖餐が始まる時、そして、聖餐の最後、シメオンの賛歌が歌われる時、そこを去ります。

・感謝の祈りの文言は聖書に基づく伝統的な祈りのことばとして、一部を除いて、青式文からの変更はありません。

##### ・感謝の祈り

福音書とパウロの書簡に見出す最後の晩餐の記事によれば、イエスは食事の初めにパンを取り感謝し、そして食事の終わりに盃を取り感謝しました。この感謝の祈りは時には「祝福」と呼ばれ、この名は神に感謝し神を賛美し、神の御業を称え宣言した古代ユダヤ人の食事の祈りの形式から取られました。そして、イエス・キリストの教会は主の食卓で感謝してきました。この感謝の祈りにはたくさんの異なる形式があります。しかし、ルター一派では通常、いつでも牧師と会衆の間で交わされる対話、全世界の創造と贖いにおける神の救いの御業の宣言、天使の歌、晩餐でのイエスの約束の言葉の告知、そして主の祈りが含まれます。また感謝の祈りの中にはこの食事が用いられるための聖霊祈願や三位一体の神への頌栄も含まれます。主の食卓におけるこの行為はキリスト教の最も特徴的なしるしの一つであり、キリスト者は食物を感謝し、そして、イエスを感謝するのです。

##### ・パン裂き

最後の晩餐でパンを裂いたことが、聖餐自体の呼称として認識されていた時代もあり、パンを裂く行為に大きな意味がありました。カトリック教会はアグヌスディ（平和の賛歌）を歌っている間にパンを裂き、司祭は個人的な準備の祈りを祈り、それから、信者に与えます。その時、パンを裂く所作は、十字架に付けられ犠牲となったキリスト

をイメージさせます。しかし、ルター派は、会衆への配餐の時に、パンを裂きます。これはキリストの犠牲ではなく、キリストの体であり教会の一致を示す一つのパン（神の恵み）を皆で分かち合うことを意味します。更には、そこに集う信徒のみならず、今受けようとしている神の恵みを必要とする教会の外の人々、即ち、その恵みを分かち合うべき私たちの隣人をも思い出させる交わりへと私たちを導きます。

- ・「主の祈り」はエキュメニカルな交わりにおいて、他教派と共通に祈ることができるように「日本聖公会／ローマ・カトリック教会共通口語訳」（2000年）を採用しました。「NCC（日本キリスト教協議会）統一訳」（1971年）、そして「文語訳」（1880年）と共に、選択肢の一つとしてあります。日本聖公会、カトリック教会は、この使用を認めて下さっていることから、「日本聖公会／ローマ・カトリック教会共通口語訳」を断って用いる必要はありません。

- ・陪餐

現在は様々な状況が考えられます。ウエハース・パン、また食物アレルギーの人への配慮も必要となるかもしれません。また、パンとぶどう酒をどのように受けるかについて一定の決まりを持ちません。会堂の作りによっては、配餐用のルールが設けられているかもしれません。跪く行為について考えてみることも大切かもしれません。

- ・「シメオンの賛歌」の位置

改定式文は「シメオンの賛歌」をスウェーデンのルター派教会が初めて用いた原初の位置に戻します。

「シメオンの賛歌」は老シメオンが幼子キリストにまみえたときの賛歌で、救いを見た喜びに、安らかに去ることが出来ると感謝を歌います。古くは教会の終課(Compline)で歌われてきました。「主よ、あなたはみことばのとおり、僕を安らかに去らせてください。」と歌い、一日の営みを感謝して締めくくりました。そのため、ローマ・カトリック教会や英国国教会は「シメオンの賛歌」を主日礼拝ではなく、一日の終わりに行う終課において歌います。

それをルーテル教会は聖餐の応答歌としました。1531年スウェーデンのルター派教会は初めて、聖餐に与った後「シメオンの賛歌」を歌いました。聖餐が真のキリストの体と血であるとの信仰から、主にまみえた感謝として「シメオンの賛歌」を歌うことが最もふさわしいと考えたのでした。シメオンが子供をメシアとして知り、腕に抱いたように、私たちは手に受け、口に頂き、キリストの御臨在としてこの食事の賜物を受け入れ感謝するのです。そのため、聖餐に与った後、そして仕えるために派遣される直前に「シメオンの賛歌」を歌うことを選択したのでした。

聖餐は、神様の恵みを頂く主の食卓であり、召された者も地上にある者もすべて、共に一つの恵みを喜び受けるこの祝いの食卓に、私たちは招かれるのです。たとえ、再び神の御前に集うことができなかつたとしてさえ、神が与える憐みの光を信じて。

(平岡仁子)

## 派遣

### ○概観

20世紀、世界における典礼刷新の動きの中で、ルター派は礼拝の結びの部分に古くて新しい強調を与えました。それが【閉会 Conclusion】ではない、【派遣 Sending】でした。神の招きが人々の集まりを形づくるように、派遣もまた人々の集まりを造り上げます。

人々の集まりの始めにおいて私たちが洗礼感謝へと導かれるように、「派遣」もまた私たちの洗礼を再び想起させます。なぜなら洗礼の召命こそが私たちが日々の召命へと導くからです。そして、【派遣】とは私たちが私たちの隣人のもとへ遣わされる時です。私たちは御言葉を聞き、食事で養われ、そして【派遣】において、集まりの初めである礼拝堂の入り口へと向かいます。しかし、この時、私たちはもはや、礼拝堂に入ってきた時と同じ個人ではありえません。なぜなら、私たちは神の恵みを受け取り、キリストに出会い、主の働きのために神の力を与えられた共同体であるからです。だから、キリスト者はこの民の集まりの中に留まっていることは出来ません。神の召しは苦しみと痛みの只中に生きるようにと私たちを世界へ遣わします。

【派遣】は世界へと主の民を召し出すことによって、共同体に力を与えます。【派遣】はまた、キリスト者が教会の内側にいるのではなく、キリストの身体として世界中に広がっていることを人々に気づかせます。【派遣】のパートは簡潔で短く、複雑な構成ではありません。しかし【派遣】において、キリスト者としてこの世を生きる召命を確かに肯定するのです。礼拝に招かれ、神の恵みに満たされた私たちは、【派遣】において、私たちを取り巻く世界のニーズへと向きを変えます。私たちの隣人に仕えるため、世界にキリストの身体である自分自身を与えるために、私たちは遣わされ、そして、礼拝は完成します。

しかし、派遣は終わりではありません。遣わされた人々は再び礼拝に戻ってくるからです。世界へ散らされた人々は次の日曜日に再び集められます。日曜日は週の始めの日、そしてまた「第8の日」とも呼ばれ、週の始めの日から、「第8の日」へと、日曜日のサイクルは続きます。そして、この循環こそが、私たちの人生そのものです。しかし、いつも全ての人々が再び日曜日の礼拝に戻るとは限りません。病気、環境、様々な理由によって、私たちはその時を迎えます。しかし、たとえそうなったとしても、日曜日から日曜日へと続いている流れは、神が決して私たちを見捨てないことに気づかせてくれるのです。

ルター派は聖餐に与った後、そして、隣人とこの世に仕えるために派遣される前に、「シメオンの讃歌」（ルカ2：29－32）を歌うことを選択しました。老人が幼子をメシアと知り、腕に抱いたように、キリストがご臨在する食事を賜物として受け入れるように私たちは招かれます。そして、それから老人が全ての人を照らす神の光を見たので私は平安の内に去ります（死んでゆきます）と言ったように、私たちもまた平安の内に行きますと歌うのです。もしこれが、自分にとってこの世で最後の礼拝になったとしてさえ、神がお与えくださる憐れみの光を信じて。

### ○実際の取り扱い

- ・「感謝のささげもの」

神の恵みを受け、私たちは私たちの隣人へと向きを変えます。「感謝のささげもの」

は【派遣】で行われます。その初めから、キリスト者は貧しい人々の重荷を少しでも和らげるために、日曜日に献金をしていました。パウロはIコリント16章2節でこの献金について語り、また貧困であるにも関わらず他者に与える慈善の業のゆえに、マケドニアの貧しいキリスト者たちを褒め称えています（IIコリント8章2節）。更に2世紀の文献は、このような献金が実践され続けていたことを明らかにします（ユスティノス「第一弁明」）。

これまで奉献は、その言葉が示すように、神への捧げものであり、捧げるもの（献金）と共に、自分自身をも神に捧げることが強調されてきたかもしれません。しかし、奉献は私たちが神に何かの犠牲を捧げる行為ではありません。神はみ子イエス・キリストをただ一度だけ十字架の上で犠牲にしてくださいましたことで救いは完成されたのです。私たちが捧げる犠牲を神は必要とされません。

ルターは『ドイツミサ』や『ミサと聖餐の原則』においてははっきりと言葉にしていますが、犠牲ということに対する批判をほのめかしています。ルターにとって、御言葉と聖礼典によってキリストを受け取ることは、受け取った主イエス・キリストによって、私たちが飢えや困窮の中にある隣人へと向きを変えられることを意味しました。お金を神への犠牲として捧げることはやめるべきでした。むしろ、捧げものはそれを必要とする人々のために集められ、人々に分け与えられるべきとルターは考えました。神に犠牲を捧げるのではなく、賜った恵みを人々と分かち合うために。

「 sacramentを十分に理解するように民衆に教えたので、人々は外的な食物や資産をも持ち込み、必要とする者たちに分け与えた。ミサにはコレクタという言葉が残っており、共同に集めるという意味である。貧しい人々に与えるために、共同募金を集めるのと同じ。」（キリストの聖なる真のからだの尊い sacramentについて、及び兄弟団についての説教）

「あなたがこの sacramentに参加した時、」ルターは言います。「あなたは愛の中にあることが必要です。あなたはそのことに悲しみを感ずる必要があるのです。世界は罪なき者の不当な苦しみで満たされています。あなたは戦い、働き、祈り、もしあなたがそれ以上できないのなら、あなたは心からの憐みの情を持たねばなりません。」

ルターによるミサは宣教へと私たちを導きます。私たちは教会の宣教のために、神の恵みへの応答として世界で困窮する人々のために「感謝のささげもの」を集めるのです。

・「派遣の祈り」

感謝の捧げものを集めた後、私たちは奉献の祈りではなく、派遣の祈りを祈ります。

なぜなら、神は私たちを福音の証言者として、集めた捧げものを携え、この世界へ、隣人のもとへ遣わされるからです。

・「派遣の歌」

礼拝に集められた人々は受け取った恵みへの感謝と遣わされる喜びにおいて一つとなり、神を賛美し、称えます。

・「祝福」

4世紀以前に、礼拝の最後に祝福を与えたという形跡はありません。しかし、実際は典礼書に記載がないだけであって、実践されていたのかもしれませんが。

ルターは「ミサと聖餐の原則」においてこう述べています。「普通の祝福がなされる。あるいは、主ご自身が定められた民数記6章(24節以下)のものを用いる。あるいは詩編67編6節～7節、キリストは天に上りながらその弟子たちを祝福された時(ルカ24章50節～51節)同じようにこれを用いられたと私は信じている。」

(ルター著作集第1集5 291頁)

また、ルターはドイツミサでは聖餐後の祈りに続けて、アロンの祝福を用います。宗教改革の教会は一般的にこの伝統に従っており、ドイツ中部と北部において、祝福は聖職者たちによって栄唱され、礼拝式文は多くの音楽曲を提供してきました。

・「派遣の言葉」

I 司式：行きましょう。主の平和のうちに。

仕えましょう。主と隣人に。

会衆：(アーメン) 私たちは行きます。

神の助けによって。

II 司式：行きましょう。主の平和のうちに。

仕えましょう。主と隣人に。

会衆：私たちは分かち合います、恵みを。

伝えます、福音を。

「祝福」に続き「派遣の言葉」を交します。礼拝において受け取った賜物によって、主と隣人に仕え、分かち合います。世界にキリストの体である自分自身を与えるために、神に助けて頂き、私たちは礼拝からこの世界へと遣わされます。

「私はそれゆえ、私自身をキリストとして隣人に与えます。まさにキリストがご自身を私に与えられたように。」

(キリストの聖なる真のからだの尊い sacrament について、及び兄弟団についての説教)

司式者は会衆に、ここから世界の様々な働きへと遣わされることを告げます。会衆はキリスト者として、この世界でキリストの手となり足となって生きることを表明します。派遣の言葉は恵みを受け、遣わされる私たちの強い応答を示します。

私たちは神への感謝に満たされ、礼拝の集まりから各々の生活の場へと出て行きます。聖なる食事と神の言葉によって私たちは新たに創り変えられました。その時、私たちは心から神に応えます。

会衆：(アーメン) 私たちは行きます。

神の助けによって。

会衆：私たちは分かち合います、恵みを。

伝えます、福音を。

ここにおいて、礼拝と宣教は表裏一体であることが明らかにされるのです。

(平岡仁子)



## 主日礼拝式文（御言葉の礼拝）

### ○概観

礼拝は神の恵みへの招きです。そのため、聖餐を伴わない主日礼拝式文「御言葉の礼拝」を選択肢と致します。

ではなぜ、御言葉の礼拝が実践されてきたのかを、礼拝の歴史から考えてみたいと思います。そもそも、御言葉の礼拝とはユダヤ教のシナゴグ礼拝にその基盤を持つと考えられています。シナゴグ礼拝はユダヤ人がバビロニア捕囚によって、異国の地に連れて行かれたおよそ紀元前6世紀ごろから始まったと考えられています。ユダヤ人はバビロニアという異国の地であって、神が自分たちにお与えになった救いの出来事を思い起こすことを必要としました。そして、その想起のために最も有効かつ優れた方法が祈りと教育であることを見出したのでした。シナゴグ礼拝という教育の場にはエルサレム神殿のような神殿も、また神殿の儀式を執り行う祭司も必要としませんでした。シナゴグ礼拝の中心は歴史における神の御業を読み（朗読）、詩編を歌い、神に祈り、そして、その歴史を深く顧みる（説教）ことによって、神を褒め称えることでした。

その結果、シナゴグ礼拝は神の契約を共同の記憶において教え、伝達してゆく場となったのでした。後にキリスト教徒となったユダヤ人たちもまた、このような公同の礼拝に慣れ親しんでいたと思います。聖書によれば、キリスト者たちは家ごとに集まり、聖餐（愛餐）に参加すると同時に、シナゴグの礼拝にも参加していたからです（使徒言行録13章14節～15節）。しかしその後、キリスト者たちはシナゴグから追放されることになり2世紀半ば頃までにはシナゴグ礼拝（言葉）と聖餐（行為）が融合した礼拝の形が生み出されていきました（ユスティノス「第一弁明」）。

しかし、初期教会が礼拝の構成要素の中で失ったものもまた、ありました。その一つが旧約聖書の日課でした。4世紀初頭からなくなり初め、20世紀の半ばまで消滅していました。また、洗礼を受けていない人は、聖餐が始まる前に退去しなければならないという習慣が、6世紀の終わりごろまで続きました。7世紀までには「執り成しの祈り」あるいは「信徒の祈り」と呼ばれていたものが、ローマ典礼の礼拝から失われ、そして反対に、入堂の儀式（入祭唱、キリエ、グロリア）、集祷他が加えられました。また、礼拝の始まりを告げるものとして準備の儀式（罪の告白と赦免の宣言）が加えられました。

中世になると旧約朗読の応答であった詩編は旧約日課の喪失によって昇階唱に変化し、使徒書と福音書朗読の間に短縮して置かれました。そして、そこにハレルヤ唱や詠唱が付け加えられました。また、中世には説教のすぐ後に、「ニケア信条」がおかれました。そして、このような歴史的展開を経た礼拝は6世紀から16世紀の間、御言葉と聖餐による一つに統合された礼拝へと展開されていきました。宗教界改革者たちは少しの変更を加えただけで、これを受け入れました。

ルターは「ミサと聖餐の原則」においてわずかな変更を加え、説教の奨励、会衆讃美歌、

自国語による礼拝という点において大きく貢献しました。しかしその後、ルターの意図とは異なり、17世紀、18世紀、個人の敬虔的心情を重んじ、そこに信仰の本質を見ようとした敬虔主義と信仰ではなく理性においてとらえようとする合理主義とによって、多くの国のルター派は毎週聖餐式を執り行う習慣を失いました。その結果、「御言葉の礼拝」または「聖餐前部」と呼ばれる礼拝の一部がルター派における主日礼拝の通常形式となり、二つの重要な構成要素であった「御言葉」と「 sacrament（聖餐）」は分離して行ったのです。他方、宗教改革以降、聖餐を伴わない「御言葉の礼拝」を伝統として築いていったプロテスタントのグループもまた、存在しました。

1978年アメリカのルーテル教会が出版した Lutheran Book of Worship は失われた礼拝形式を回復させ、当時、高い評価を受けました。

今回の改定による「御言葉の礼拝」の式文構成は基本的には、聖餐を伴う「主日礼拝式文改定版」に従っています。構成は【招き】・【みことば】・【感謝】・【派遣】とし、【聖餐】に変わって、【感謝】と呼ばれるパートを作りました。

主日礼拝式文【御言葉の礼拝】は神様に招かれ、祈り、賛美する聖徒たちの集まりの中心で福音が宣言されます。主日礼拝式文【御言葉の礼拝】は、「朗読」・「説教」・「賛美」によって主の復活と御臨在を明らかにします。神の約束を耳で味わい体験することを意図します。また、説教はルターが小教理問答の初めにおいて勧めているように、人々に sacrament（洗礼・聖餐）に対する飢え渴きをもたらします。

「私たちはだれも信仰や sacrament に強制すべきでなく、また、いかなる定めや時、所などを定めるべきでもありません。彼らが私たちの定めなしに自分から求めて、すぐさま私たち牧師に、 sacrament を授けて欲しいと願うよう説教するのは・・・だからあなたはここで決して教皇と違って、なんの定めも作ってはならず、ただこの sacrament における益と害、必要と用い方、危険と救いを述べるならば、あなたの強制なしに彼らは確かにやってくるでしょう。」

（エンキリディオン小教理問答 ルター研究所訳 2014年 22頁～24頁）

そして、世界と教会のために、「教会の祈り」を祈り、教会の宣教と世界のニーズのために感謝のささげものを集めます。これら全ては福音への応答として行われ、神の言葉なしに生きることが出来ない私たちは、神の言葉に感謝し、私たちの隣人のもとへ遣わされます。

#### ○実際の取り扱い

・【招き】 主日礼拝式文改定版と同じです。

礼拝は神の招きに応えることによって始まります。冒頭の部分は御言葉の礼拝の始まりを告げる準備の儀式（罪の祈りの告白と赦免の宣言）として加えられた部分です。

ルターは『ドイツ・ミサ』において取り上げていません。当時ローマ典礼において懺悔は準備行為としてミサを司る者たちのみによって私的になされており、ミサそのものに含まれておらず、ルターは言及しませんでした。これまでの式文ではここを【開会】と名

付けました。しかし、教会とは集められた聖徒の交わりであり、集まることはキリスト教礼拝において最も主要な事柄であるがゆえに、神の招きによって礼拝に集まっていることを覚え、【招き】としました。

礼拝への招きは受洗の有無、また信仰生活の長短に関わらず、全ての人を招く神様の恵みです。そして、この招きにおいて、ルター自身が「キリスト者の一生は心を入れ替え、自己の罪を憎むものである」と言っているように、悔い改めが大切なことは言うまでもありません。しかし、私たちを導くお方は神の霊・聖霊です。そして、神の招きは全てに先立つのです。

「人間は、聖霊の恵みや助力、その働きによらないで、神に受け入れられ、心から神を畏れ、信じ、また心の中から生来の悪い欲望を取り除くことはできない。むしろそのようなことは、神のみことばを通して与えられる聖霊によって起こるのである」

(アウグスブルク信仰告白第 17 条)

・【みことば】 主日礼拝式文改定版の信仰告白まで

礼拝はみ言葉なしに実践されません。神の言葉が語られるところに、私たちは招かれ、福音を受け取り、福音に生きる者とされます。礼拝は初めからみ言葉を朗読し、神の言葉を聴くことと「パンを裂くこと」(聖餐)を、中心に据えてきました。

- ① つどいの祈りは主日の主題を反映するため、【招き】の最後に移行し【招き】と【みことば】を結びつけます。
- ② 「聖書朗読」は 3 年周期 3 つの日課です。詩編は第一日課の応答として置かれています。
- ③ 「福音書朗読」の前後に、キリストの福音に対する栄唱賛美を回復させました。また、「福音書朗読」と「説教」の一体性を示すために、連続しています。
- ④ 「信仰告白」 使徒信条 ニケア信条

・【感謝】 【聖餐】に代わる【感謝】

- ① 御言葉を聞き、神の恵みを受け取ったことへの応答として、私たちは「教会の祈り」を祈ります。万人祭司とは、神の憐みの福音によって隣人に仕え、困窮する世界の人々のために私たちが祈ることを意味しており、このことにおいて私たちは共に祭司の役割を果たすのです。
- ② 主の祈りはエキュメニカルな交わりにおいて、「日本聖公会/ローマ・カトリック教会旧通口語訳」を採用しました。口語訳・文語訳と共に、選択肢の一つです。

・【派遣】 主日礼拝式文改定版と同じです。

- ① 「シメオンの賛歌」は御言葉(神の恵み)への感謝として位置づけています。【感謝】と【派遣】の間で歌うことができます。
- ② 「派遣の言葉」は恵みを受け、遣わされる私たちの強い応答を示します。私たちは神への感謝に満たされ、礼拝から各々の場へと遣わされます。神の御助けによって。

(平岡仁子)

## 教会暦・典礼色

### 教会暦

神による創造とエジプトでの奴隷からの解放を心に刻む日として、イスラエルの民は、週に一度安息日を定め、また、一年の折々にそれを思い起こす祝祭日を定めてきました。

私たちはキリストの教会において、新しい神の民として、ユダヤ教の安息日を発展させて、主の復活を祝う日として、日曜日を主日と定め、神を礼拝する日として習慣づけました。さらには、聖書が告げている様々な神の救いのわざを祝い、その約束を心に刻み、さらには、聖書に登場する初代教会の信仰者たちの模範を覚える折々の日を定めます。

### 教会暦および典礼色の実際とその取り扱い

#### 1. 神の救いと主イエスの生涯に関する祝祭日・記念日

#### 待降節

教会暦の一年は、神の御子、主イエス・キリストのこの世界への来臨を心に刻む「待降節」から始まります。この待降節に、救い主が、かつてひとりの乳飲み子としてこの世界に来られた降誕の祝いと、またやがて神の救いが完成する終わりの日に再び来られる再臨を待ち望みます。待降節は、「主の降誕」の祭日からさかのぼり、その直前の4週間前の日曜日、主日から始まります。

典礼色は、希望を表す「青」、あるいは慎みと悔い改めを表す「紫」を用います。(待降節第3主日には、待ち望んでいる救いがすぐ近くまで来ていることを覚えるため「喜びの主日」として、「薔薇色」を用いることも可能です。) 待降節には、慣例として、キリストの生涯を歌う「グロリア」は用いません。

#### 主の降誕 12月25日

待降節に心を整えた後、私たちは、神の御子、救い主イエスがこの世界でお生まれになったことを祝う「主の降誕」の祭日を迎えます。この「主の降誕」は、神が人の肉の姿となり、この世に宿った「受肉」の出来事の祝いでもあります。主の降誕の祭日は、前日12月24日の日没後より始まります。

典礼色は、救い主の高貴さを表す「白」、または、その栄光を現わす「金」です。

主の降誕の祝いは、降誕の夜から「主の顕現」または「主の洗礼」の祝日まで続きます。(各教会の慣習によります) ですので、12月25日以降、1月5日までの主日は「降誕節」の主日となり、典礼色は白です。

#### 命を奪われた幼な子の日 12月28日

主の降誕の後に起こった、時の権力者ヘロデ王によるベツレヘムに暮らす子どもたちの虐殺を、12月28日に「命を奪われた幼な子の日」として覚えます。この日、様々な暴力や不正義などに苦しむ子どもたちに神の平安が与えられることを祈り、私たちがそのために働く決意をする日としても過ごします。

典礼色は、子どもたちの流した血を覚える赤、または降誕節の最中として白です。

#### 主の命名 1月1日

1月1日を、主の降誕12月25日から8日目に主がイエスと名付けられたことを覚え、「主の命名」として祝います。降誕の喜びの中で、典礼色は白です。

## 主の顕現 1月6日

1月6日、「主の顕現」の祝日を迎えます。これは、東方の占星術の学者たちが長旅の結果、乳飲み子イエスと出会い、礼拝した出来事を覚え、御子が、全世界の救い主として顕されたことを祝う日です。

なお、1月6日が週日の場合、1月2日から5日まで主日を迎える際には、「主の顕現」の主日として振り替えても構いません。ただし7日または8日が主日の場合、その年の主日に「主の顕現」を振り替えることはしません。この日の典礼色は、白または金が用いられます。

## 主の洗礼

1月6日の「主の顕現」の後、1月7日以降の初めの主日（顕現後第一主日）を、「主の洗礼」の祝日とします。主が洗礼者ヨハネから洗礼を受けたことを覚える日です。主の洗礼の際、天から主イエスに語りかける声が聞こえ、聖霊が鳩のように降ったとの証言に基づき、この主の洗礼の日に、父と子と聖霊の三位一体の神が顕された日として祝われてきた歴史があります。この日の典礼色は、白または金です。

## 顕現後

主の洗礼の翌週からは、顕現後の主日として、福音から主の生涯と教えについて聞いてまいります。教会暦は「顕現後第〇主日」とし、典礼色は信仰の成長を意味する緑です。

## 主の宮詣で 2月2日

2月2日、主の降誕から40日、ユダヤ教の律法の定めに従い、エルサレム神殿にささげられたことを覚えて、「主の宮詣で」の祝日といたします（ルカによる福音書2章22節から40節・教会讃美歌146番）。この日は、シメオンの賛歌（ヌンクディミティス）の起源でもあります。典礼色は、白です。

## 変容主日（顕現後最終主日）

四旬節に入る直前の主日、つまり顕現後の最終主日を、「主の変容」の祝日とします。典礼色は、白または金です。

## 灰の水曜日

「変容主日」の後、「灰の水曜日」を迎え、この日から四旬節が始まります。旧約聖書の神の民が、神の前に自分の罪を悔い改めて、頭から灰を被ったことに倣い、この日の礼拝で、罪を悔い改め、灰を頭から降りかけたり、灰を用いて額に十字のしるしを記したりする慣習があります。

四旬節には、慎み深い生活を心がける慣習から、礼拝で「ハレルヤ」を用いず、代わりにフィリピ書のキリスト賛歌に基づく「詠唱」を歌います。（ただし、マルティン・ルターは「四旬節こそハレルヤがふさわしい」と述べています。）また、原則として、キリストの生涯を歌うグロリアも、四旬節の間、（聖木曜日の聖餐礼拝を除き）用いません。灰の水曜日には、悔い改めと慎みを意味する紫、または罪と死を意味する黒を、典礼色として用います。

## 四旬節

灰の水曜日から始まる四旬節では、慎み深さを心がけ、明るい礼拝の雰囲気は避ける傾向があります。しかし同時に、四旬節の間も、主日は主の復活の祝いの日ですから、四旬節の間の6回的主日は、「悔い改めの40日」とは別個に数えられます。ですから、慎みと共に、主の日としての喜びもまた大切にしたいものです。

主日は「四旬節第〇主日」とし、典礼色は、通常、慎みと悔い改めを表す紫です。ただし、四旬節第4主日は、主の復活の祝いが間もなく近づいていることを喜び、歡喜の主日として、薔薇色も可能です。なお、聖週の典礼色については、別途述べます。

#### エルサレム入城／主の受難

四旬節の最後の主日は、「主の受難」の主日です。この日の礼拝の冒頭、主の「エルサレム入城」を覚えて特別な祈りをします。その後、主の受難を覚えた礼拝となります。この日から、主の十字架への歩みを特に心に刻む「聖週」に入ります。典礼色は、主の血と十字架を表す赤、または四旬節の典礼色である紫です。

#### 主の誕生告知 3月25日

天使ガブリエルがマリアのもとを訪れて、彼女の妊娠と、救い主の誕生を告げた出来事を覚えます。典礼色は、白または青です。

#### 大いなる三日間

聖週の木曜日から、教会暦の一年で最も重要な「大いなる三日間」に入ります。それは、「聖木曜日」・「聖金曜日」・「主の復活の夜」です。

##### ・聖木曜日（洗足と聖餐）

「聖木曜日」には、主が弟子たちの足を洗われ、また、ご自身の体と血としてパンとぶどう酒を弟子たちに与えられた出来事を心に刻む「洗足と聖餐」の日です。典礼色は、主によって洗い清められることと、聖なる過ぎ越しの食事を覚えて白を用いますが、聖週の赤または四旬節の紫も可能です。

##### ・聖金曜日（主の受難日）

翌日、「聖金曜日」は、主が十字架で苦しみ死なれたことを心に刻む「主の受難日」です。典礼色は、赤または紫、あるいは死と悲しみを表す黒が用いられます。

##### ・主の復活の夜

聖金曜日（主の受難日）の翌日「聖土曜日」を心静かに祈りの時として過ごし、その日没で四旬節は終了します。聖土曜日の典礼色は、無し、または黒です。

その土曜日の夜半（従来は深夜）から主の復活を祝う日として位置付けられます。典礼色は、白または金です。洗礼式を行い、また洗礼の想起をすることが伝統的にふさわしい礼拝です。

#### 主の復活

前夜の「主の復活の夜」に続き、翌朝は「主の復活」の主日です。この日は、毎年、春分の日次の満月の直後の日曜日となり、典礼色は、白または金です。

#### 復活節

その後の主日は、復活の祝いが続いているとの理解から「復活節第〇主日」となり、主の復活の主日の翌週が「復活節第2主日」となります。典礼色は白です。

#### 主の昇天

主は復活後、40日間、弟子たちに現れ、天に昇られました。これに基づき、主の復活から40日目の木曜日を、「主の昇天」の祝日とします。なお、これを、直後の主日（復活節第7主日）に振り替えて「主の昇天」の主日として祝うこともできます。典礼色は、白または金です。

## 聖霊降臨

主の復活から50日目、ユダヤ教の五旬祭の日に、弟子たちに主が約束された聖霊が降り、信仰者の共同体としての教会が形成されるきっかけとなりました。これを祝い、復活節第7主日／主の昇天の主日の直後の主日を「聖霊降臨」を祝う祭日とします。典礼色は、聖霊の炎を表す赤です。

## 三位一体

聖霊降臨後第一主日を、「三位一体」の祝日とします。私たちが信じる神が、父と子と聖霊の三つの位格を持ち、かつ一体であることを祝い、その信仰を新たにします。この日の礼拝の信仰告白として、アタナシウス信条（その全部または前半部分）を用いることもなされてきました。典礼色は、白または金です。

## 聖霊降臨後の主日

三位一体の祝日の翌週からは、「聖霊降臨後第〇主日」とし、典礼色は緑です。この期節は、毎週、与えられている福音書から、主イエスの生涯と教えを受け止めています。この緑の季節に教理問答説教がなされてもよいでしょう。聖霊降臨後の主日は、待降節の直前まで続きます。

## 聖霊降臨後最終主日 永遠の王キリスト

聖霊降臨後最終主日に、教会暦の一年の終わりを迎え、この日を「永遠の王キリスト」の主日とします。典礼色は、王であるキリストの栄光を表わす金または永遠を表す白、聖霊降臨後の主日として、緑のいずれかを用います。

## 2. 教会生活において特に重要な記念日

### 宗教改革日 10月31日

宗教改革者マルティン・ルターが1517年10月31日に「贖宥の効力に関する討論」を発表したことを、宗教改革が始まったきっかけとして位置付け、その改革が今も続いていることを受け止めます。この日が主日でない場合は、10月最終の主日に振り替え、「宗教改革主日」としても構いません。典礼色は、聖霊の働きを表す赤です。

### 全聖徒の日 11月1日

神により聖徒とされたすべての人たちを覚える日です。すでにこの地上の生涯を終えて天に召された人々を覚える特別の祈りをするのにもふさわしい日です。この日が主日でない場合は、11月第一の主日に振り替え、「全聖徒主日」としても構いません。典礼色は、永遠を表す白、または殉教と聖霊の導きを表す赤です。

## 3. 新約聖書の人物等の記念日

神の救いの御業と主の福音が明らかにされるために、また、私たちの信仰の模範として、以下の人物等の記念日を定めます。教会の慣例により、また必要に応じて、それぞれの記念日を覚えて礼拝をすることができます。主日に記念日が重なった場合は、その主日に記念日を覚えた礼拝をすることも可能です。（ただし、通常主日の教会暦が優先となります。）

1月25日 使徒パウロの回心 典礼色：赤  
2月24日 使徒マテア 典礼色：赤  
3月19日 ヨセフの日 典礼色：白  
4月25日 福音書記者マルコ 典礼色：赤  
5月3日 使徒フィリポとヤコブ 典礼色：赤  
5月31日 マリアのエリサベト訪問 典礼色：白または青  
6月11日 使徒バルナバ 典礼色：赤  
6月24日 洗礼者ヨハネ 典礼色：白  
6月29日 使徒ペトロ・使徒パウロ 典礼色：赤  
7月22日 マグダラのマリア（主の復活の証言者） 典礼色：赤  
7月25日 使徒ヤコブ 典礼色：赤  
8月24日 使徒バルトロマイ 典礼色：赤  
9月29日 ミカエルと天使 典礼色：白  
10月18日 福音書記者ルカ 典礼色：赤  
10月28日 使徒シモン・使徒ユダ 典礼色：赤  
11月30日 使徒アンデレ 典礼色：赤  
12月21日 使徒トマス 典礼色：赤  
12月26日 殉教者ステファノ 典礼色：赤（白）  
12月27日 福音書記者ヨハネ 典礼色：赤（白）

#### 4. 日常生活に関連する記念日

1月1日 「新年」 白または赤

新年の聖書日課を用いて、12月31日の夜に大晦日・年越しの礼拝とすることも可能でしょう。

8月 平和祈願日 赤または緑

8月または適当な月のいずれかの主日を「平和の主日」として、平和を願い、その決意を新たにする礼拝を行うこともできます。日本福音ルーテル教会では8月の第一主日を「平和の主日」といたします。

#### 典礼色

典礼色として主に以下の4色を用います。各色の主な意味合いは以下の通りです。

白 神とキリストの栄光、永遠を表します。

赤 聖霊の働きと、主イエスや殉教者の血を表します。

紫 悔い改めと慎み、王の尊厳を表します。

緑 希望と成長を表します。



なお、これに加え、以下を用いることができます。

青 希望を表し、待降節に用います。主の母マリアに関する暦でも用います。

薔薇 慎みの中での来るべき喜びを表します。待降節第3主日と四旬節第4主日に用います。

黒 悲しみ、死、悔い改めを表します。

金 神とキリストの栄光を表します。

諸式においては、その日の教会暦に基づく典礼色を用いるか、または以下を参考にしてください。

洗礼 主日や祝祭日の礼拝以外で行われる場合は、聖霊の働きとして赤が用いられます。

堅信 同上です。

献堂・教会の周年記念式 単独で献堂式が行われる場合は、聖霊の働きとして赤を用います。主日や祝祭日の礼拝で行われる場合は、当日の教会暦に基づく典礼色が用いられます。

葬儀 復活と永遠を表す、白を用いることができます。ただし教会の慣例により、紫や黒を用いることも可能です。

結婚式 神とキリストの栄光、また清さを表す白を用いることができます。教会の慣例により、赤を用いることも可能です。

(白井真樹)

## 聖書日課 (Revised Common Lectionary)

### I 聖書日課とは

礼拝に用いる聖書朗読のリストを聖書日課と呼びます。初代教父たちは少なくとも典礼の中心的な祝祭において、説教者個人の好みで日課（テキスト）を選ぶことはなく、日課（テキスト）を定める何かしらの一定の基準をもっていたと思われます。基準とは教会暦における期節と祝祭日に関係づけられるというものでした。中世までに西洋の教会は毎日曜日2つの聖書朗読による1年周期の聖書日課を形成しました。福音書の朗読とその福音書に相応しい使徒書からの朗読が選ばれ、また、イントロイトゥス（入祭唱）と呼ばれた詩編が聖歌隊のために選ばれました。

私たちルター派もまた、礼拝において聖書日課を用います。なぜなら、個々人が自分自身でテキストを選ぶなら、その選択は多くの制限をもつことになるからです。

私たちキリスト者は聖書から御言葉を聞き、毎週日曜日、聖書を通してお語りになられる神様と出会います。そして、この毎週朗読される聖書箇所を聖書日課と呼び、聖書とはこの聖書日課が集められたものであるとすることができるのです。

### II 聖書日課の使用

聖書日課は教会暦に従って作られ、歴史的には西洋の教会は毎週日曜日2つの聖書朗読による1年周期の聖書日課を長らく使用してきました。ルターはその中世の聖書日課を受け入れました。そして、聖職者たちにキリストによって示された神の福音に明確な焦点を置いて説教することを求めたのでした。

しかし、20世紀半ばカトリック教会から始まった典礼刷新運動が世界のキリスト教会に大きな影響を与えていきました。カトリック教会はこの典礼刷新により、3年周期3つの聖書朗読からなる聖書日課を作り、この聖書日課が世界のプロテスタント教会に広く受け入れられていくことになりました。そして、3年周期、3つの聖書朗読による聖書日課は20世紀の世界において、キリスト教が教派を超えて成し遂げた最も重要な成果であると言われています。

### III 改訂共通聖書日課 (Revised Common Lectionary) の成立

1969年ローマカトリック教会は3年周期3つの聖書朗読による聖書日課を作成しました。この3年周期の日課は教派を越えて受け入れられ、1970年代、プロテスタント教会（ルーテル、聖公会他）は各々、カトリックの聖書日課に独自の部分的改訂を加えた日課を用いました。「ルーテル教会式文」の聖書日課もまた1970年代、カトリック教会の聖書日課に独自の部分的改訂を加えました。

しかし、教派ごとに様々な日課が数多く存在することから、教派をこえた委員会が結成されます。そして、1983年、プロテスタント諸派による「共通聖書日課」(Common Lectionary) が出版され、更に1992年、改訂を加えた「改訂共通聖書日課」(Revised Common Lectionary) となり、世界中のプロテスタント教会において広く使用されることになりました。

聖書日課の務めは死と復活の主であるイエス・キリストの宣言です。それゆえ、キリスト教の祝祭は毎日曜日であり、教会暦はそのことを明らかにします。毎日曜日の礼拝の焦点は、復活された主と教会共同体に集う私たちが出会うことにあり、聖書解釈もまた、教会

暦に従った3つの聖書日課によって、読み解かれます。

#### IV改訂共通聖書日課 (Revised Common Lectionary) の構成と実践

聖書日課の中心は福音書であり、旧約聖書と使徒書は福音書を中心にして選ばれています。マタイ福音書 (A 年)、マルコ福音書 (B 年)、ルカ福音書 (C 年) によって3年周期は作られ、ヨハネ福音書は ABC 年各年の中心的な祝祭において朗読されます。聖書日課全体において、4つの福音書は対話し、聖書日課は教会暦に従って選ばれ、教会暦は聖書日課によって意味を与えられます。そして、その教会暦の中心は二つあり、それが主の復活と主の降誕です。教会暦は二つを頂点として組み合わせられ、構成されています。

初期キリスト教は、キリストの死と復活を結びつける洗礼の礼典を「主の復活の夜」に執り行い、ここから洗礼の準備期間の時として四旬節が設けられました。そして、20世紀の典礼刷新運動はこの洗礼準備の時である四旬節を再び、回復させたのでした。その結果、改訂共通聖書日課にある「大いなる3日間」「聖木曜日」・「聖金曜日」・「主の復活の夜」と呼ばれる典礼に再び、大きな意味が与えられ、実践されるようになりました。また、「主の受難」主日に実践される「主のエルサレム入城」の典礼も式文改定において加えました。

詩編は3つの聖書朗読のテキストとしてではなく、旧約聖書の応答として置かれています。旧約日課の応答として詩編を用いることは最も古い詩編の使い方と言えます。そして、20世紀における典礼改革の一つは、会衆によって詩編が歌われることを復活させることでした。招きの最後「つどいの祈り」は聖書日課が示す主日の主題を受けて祈る祈りです。また、改訂共通聖書日課による週日の日課は、主日の日課の流れに従った3つの聖書が選択されており、主日から次の主日へと向かう私たちの信仰の糧として用いることができます。

教会暦の1年を大きく分類すると次のようになります。一年を通した聖書日課はこの教会暦に従って選ばれ、教会暦は指定された聖書日課によって、意味を与えられます。

#### ●教会暦

##### 1) 待降節

教会暦の一年は、神の御子、主イエス・キリストのこの世界への来臨を心に刻む「待降節」から始まり、「待降節第〇主日」と呼ばれます。「主の降誕」の4週間前から始まります。

##### 2) 主の降誕 12月25日

主の降誕の祭日は、前日12月24日の日没後より始まります。主の降誕の祝いは、降誕の夜から、「主の顕現」または「主の洗礼」まで続きます (各教会の慣習による)。

##### 3) 降誕節

1月5日までの主日は「降誕節」と呼ばれ「降誕節第〇主日」と呼ばれます。

##### 3) 主の顕現 1月6日

1月6日が週日の場合 1月2日から5日の間に主日を迎える場合、「主の顕現」主日として振り替えが可能です。但し、7日または8日が主日の場合、主日に「主の顕現」を振り替えることはしません。

##### 4) 主の洗礼

1月6日の「主の顕現」の後、1月7日以降の初めの主日 (顕現後第一主日) を「主の洗

礼」とします。

5) 顕現後

主の洗礼の翌週から顕現後第〇主日として、主の生涯と教えについて聞きます。

6) 変容主日（顕現後最終主日）

四旬節に入る週の主日、顕現後の最終主日を「主の変容」とします。

7) 灰の水曜日

「主の変容」の週の水曜日は「灰の水曜日」となり、四旬節が始まります。灰を用いて額に十字のしるしを記す慣習があります。また、四旬節には「詠唱」を歌います。

8) 四旬節

灰の水曜日から四旬節が始まります。しかし、四旬節の間も、主日は主の復活の祝いの日です。6回の主日は「悔い改めの40日」に数えられず、「四旬節第〇主日」と呼ばれます。

9) エルサレム入城／主の受難

四旬節の最後の主日は「主の受難」の主日です。この主日礼拝の冒頭に主の「エルサレム入城」を覚えて、特別な典礼を実践することができます。この主日からの1週間は「聖週間」と呼ばれ、教会暦の中で最も重要な1週間を教会は迎えます。

10) 大いなる三日間 聖木曜日・聖金曜日・主の復活の夜

聖週間の木曜日から「大いなる三日間」と呼ばれる特別な典礼を実践します。この3日間の礼拝式文は、連続する形をとっています。

・「聖木曜日」（洗足と聖餐）

聖木曜日には、主が弟子たちの足を洗われた「洗足」と最後の晩餐である「聖餐」を行います。礼拝の最後には全ての典礼布が取り除かれます。

・「聖金曜日」（主の受難）

聖金曜日は、主の十字架を心に刻む「主の受難日」です。十字架を掲げ、黙想する時をもつことができます。

・「主の復活の夜」

土曜日の日没後、復活をお祝いします。キリスト教典礼の中でも、特別な礼拝は伝統的に日没後に祝われてきました。降誕、そして復活はこの習慣に従っています。古代では一日は日没後から始まります。そのため、土曜日の日没後とは日曜日の始まりなのです。

11) 主の復活

「主の復活の夜」に続き、翌朝は「主の復活」の主日です。毎年、春分の日次の満月の直後の日曜日が「主の復活」と定められるため、日付は移動します。

12) 復活節

主の復活から50日目は「聖霊降臨」を祝う祭日となります。主の復活から聖霊降臨までの主日は復活の祝いとされ、「復活節第〇主日」と呼ばれます。

13) 聖霊降臨後

聖霊降臨後の最初の主日は三位一体主日（聖霊降臨後第1主日）となり、これ以後の主日は、待降節の直前まで、「聖霊降臨後第〇主日」と呼ばれます。そして、聖霊降臨後最終主日/永遠の王キリストの主日をもって、教会暦の一年は終わります。

(平岡仁子)

## 式文の曲について

式文改定に伴い、式文の曲についても改定いたしました。その際、「伝統にとらわれることなく自由な発想で作曲」と方針を定めましたが、現在の曲に沿ったパターンも用意いたしました。その結果、3パターンの新しい曲と現行に沿った1パターン、合計4パターンを提供することとなりました。いずれもルーテル教会のメンバーの協力により実現しました。

式文の曲を提供するにあたり、アルファベットや番号を振ることにより順番があるように思われることを避けるために、トランプのマークで分類してあります。この内、ダイヤパターンが現行に沿ったもので、ダイヤパターンとハートパターンに関しては担当者のコメントを記します。

### 「ダイヤパターン」

1. 委員会からのご依頼を、「なるべく現行（A）に沿って変更を大きくしないパターンの作成を」と理解しましたので、そのご依頼の趣旨を尊重いたしました。
2. 現行式文の歌詞とメロディの抑揚が合致していなくて日頃不自然を感じていたところがございますので、この際ですので、言葉の抑揚に合致するように心がけました。  
しかし、言葉の変更が大きくないところは、メロディもなるべく変えないので、却って現行（A）と似たメロディになって改訂版が歌いにくいと感じる結果になったことも危惧しております。
3. “十字架”という歌詞はメロディの抑揚を線で追うと十になるように極力努めました。と申しますのは、キリストの十字架と復活が、私たちにとっての一番のよりどころであり、慰めであり、礼拝式文を歌うときに特にこのことを思い返し、歌うたびに感じる事ができれば、それを超す音楽の付託はないと考えるからです。（これは詠唱に用いられているもの。）
4. 音域について、低音は、一点ハの下のロ以下を避け、高音は2点二以上を避けるように考えました。
5. 伴奏については、歌詞のリズムを支える程度の柔らかさを保つように、控えめな音数を心がけました。ピアノで音源をつくってくださったのを客観的に聞かせていただきました。ピアノの伴奏音が多すぎず、適度に聞こえたので嬉しく存知しました。多分オルガンの伴奏でも同様に感じるかと存じました。
6. 言葉として発するときには不自然に「・・・くださ～～い」と聞こえることがあります。今後の普及の時に「・・・ください」と歌い終えるようになると礼拝のなかで言葉がもっと自然に締めくくられると感じています。

作曲作業に際して、いろいろ心がけることはありましたが、以上を主なこととして記します。

### 「ハートパターン」

式文委員会から、「伝統にとらわれず自由に作曲してほしい」と声をかけていただきました。

音楽史ではそれぞれの国や時代において発展した音楽様式があり、それに<sup>のっ</sup>り多くの作品が作られ、素晴らしい教会音楽も沢山残っています。時間を経て様々な様式が吸収された現代、世界中で多様なジャンルのキリスト教音楽が生まれ、思い思いに賛美されています。私も今の自分の感性で「こんな典礼歌で礼拝ができたなら素敵だろう」と考えながら、作曲させていただきました。

作曲する上で気をつけたことは、歌いやすいメロディであること、美しい響きであること、ことばに心を込めて歌えるように、曲の流れを作ることです。作り始めたのは5年ほど前ですが、以後神学校の礼拝などで何回か試用していただき、いろいろな方からアドバイスをいただいて改作を重ねてきました。

月日を経る中、私自身の成長と共に、調整を続けた典礼歌も成長したような感覚があります。この典礼歌が、私たちが心を神様へ向け豊かな礼拝を築く礎となりますように、祈っています。

新しい式文の曲は楽譜及び伴奏音源付きデータを個別に提供できます。それぞれの状況に応じて、4つのパターン<sup>①</sup>の式文の曲が用いられますように願っています。

(中島康文)

## 司式と礼拝堂の使い方

### I 司式

#### 1) 司式とは

キリスト教会は礼拝する共同体です。それは信者の集まりであり、その中で福音書が語られ、聖礼典が福音に従い執行されます（アウグスブルグ信仰告白）。キリスト者が礼拝のための集まる時、キリスト教礼拝の最も重要なシンボルは会衆です。司式者はそれゆえ、会衆に奉仕します。キリストに代わって奉仕する人は卓越した支配的な場を持ちません。そうではなく、司式者が仕える会衆の中に場を持ち、司式者は対等、相互的な働きをします。そして、「間違いなく正しく」行うこと以上に、司式者は神の言葉と聖礼典の執行に責任を持ち、会衆の礼拝参加を励ますように招かれます。

- ・ 礼拝における司式は按手を授けられた牧師の重要な働きと言えます。
- ・ 司式者の役割は礼拝の中に何か新しいことを作り出すことではありません。会衆一人一人の心の中でキリストの言葉が成熟し、形作られることを助けます。
- ・ 司式者はまた、神に出会う礼拝について深く考えるように会衆を助けます。
- ・ 按手を受けた者の務めは、洗礼の執行、聖書の解き明かし、聖餐の祝い、困窮者への支援、そして、和解にあります。
- ・ 司式者は礼拝のプランニングから始まる礼拝全体に責任を持ちます。礼拝奉仕者に依頼をする時は可能な限り、年齢・ジェンダー・その他もろもろのことを考慮します。
- ・ 司式者は各々の奉仕者への配慮と適切な指導及び調整を行いません。
- ・ 司式者は奉仕者が喜びをもって奉仕できるように、そのリーダーシップを促します。
- ・ 司式者は朗読をよく聴き、祈り、神と会衆に信頼して説教し、聖餐において全ての人を迎え入れる主人であり、礼拝の中心から会衆をそらすようなことは避けます。
- ・ 礼拝は一人の司式者によって奉仕されるのが一番良いと言えます。一人の司式者は共同体の、そして典礼の一致をもたらします。
- ・ 一人の司式は礼拝における聖餐の祝いと御言葉が一つの行為として親密に関係づけられていることを示します。即ち、朗読され説教されると同じ言葉が、聖餐において制定されることを示します。
- ・ 司式者は礼拝の場において、司式者の席からその責任を遂行します。司式者は会衆に挨拶し、そこで祈ります。別の言い方をすれば、司式者は入堂、「福音書朗読」・「説教」、「聖餐」、洗礼盤の横に立つ時以外は、司式者の席にいます。
- ・ 司式者は典礼の行為の全てに責任があります。そして、司式者の行為は言葉以上に会衆を導きます。それゆえ、司式者は常に謙虚であるべきです。会衆は牧師から直接指導を与えられることより以上に、典礼において整えられるべきです。
- ・ 全ての牧師がいつも礼拝において奉仕すべきということではありません。礼拝での役割を持たない牧師は会衆と共に、その中に場を持ちます。
- ・ キリスト教の礼拝が様々な仕方を持つように、司式もまた、画一的な仕方を持つわけではありません。司式の仕方は、礼拝堂の構造や各々の儀式に相応しいものとなり得ます。
- ・ 会衆を参加者ではなく、傍観者としてしまう司式は相応しくありません。

## 2) 司式の実践

- ・【招き】において、司式者は洗礼盤の横に立ち、礼拝が始まります。
- ・「み名による祝福」において、司式者は「父と子と聖霊のみ名によって」と唱えながら、自分の体の上に十字を切ります。会衆もまた、この所作を同じようにすることができます。この行為は洗礼において私たちがキリストと共に死に（ロマ6章4節）、永遠に十字架によってしるしづけられたことを想起させます。「告白」と「赦し」を終え、「招きの歌」と共に、聖卓へと進みます。聖卓の前で一礼をし、司式者の席に着きます。但し、洗礼盤を用いない場合は始めから、定められた司式者の席において司式します。
- ・以前は司式者の向きに一定の法則がありました。神様に祈る場合は聖壇を向き、それ以外は会衆に顔を向けるというような。しかし、現在はそのような所作をあまりしなくなりました。司式者は最初から終わりまで会衆と向かい合って司式できます。会衆に背後を見せるのは入堂と退堂において、一礼をする時です。
- ・司式に大事なことは、どこに司式者の席を置くかということです。司式者の姿が会衆全体から良く見えるような位置に、司式者席を設けることが大切です。司式者が立ったり座ったりする動きが、会衆から良く見えるように。また、司式者の声が会堂全体に良く聞こえるような場所に、司式者は位置すべきです。音響設備が整っていたとしても司式者の声が、会衆から良く聞こえる場所が相応しいと言えます。
- ・司式者は「み言葉」と「洗礼」と「聖餐」という3つの中心が明確になるように実践します。洗礼盤は「洗礼」の時は勿論のこと、「洗礼想起」においてもまた用いることができます。「朗読」と「説教」は朗読台（説教台）を用い、そして、聖卓は「聖餐」に用います。司式の行為そのものが、この3つの中心を明確にします。
- ・「招きの歌」と共に聖卓へと進んだ後（洗礼盤を用いた場合）、司式者の席において、司式します。
- ・【みことば】の「聖書朗読」と「説教」は朗読台（説教台）においてなされます。
- ・「教会の祈り」もまた、司式者は会衆と向き合い、共に祈ります。
- ・「平和の挨拶」では互いに挨拶を交わすことができます。
- ・「聖餐の歌」が始まると司式者は聖卓の背後に回り、聖餐のために食卓を整え、その後、「聖餐の感謝の祈り・序詞」が始まります。
- ・「配餐」が終わると食卓を片付け、「配餐後の祝福」を祈ります。「シメオンの賛歌」を歌い始めると司式者は司式者の席へ戻ります。
- ・【派遣】では「感謝のささげもの」を集め最後の「祝福」を与えます。献金かごは聖卓の上に置かず、別に場所を設けます。

## II 礼拝堂の使い方

### 1) 典礼における3つの中心

礼拝という言葉はギリシャ語でレイトゥルギアといいますが、これは信仰を持つ人々は一人ではなく、共に集い神を讃美するという意味があります。礼拝とはみことばと典礼（聖餐と洗礼）を通して神に出会い恵みを受け、そして恵みに応えて讃美を捧げることです。

だから、礼拝は「教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れでる源泉である」と言えます。そして、その礼拝に集められた人々・会衆は、教会に欠くこと



のできない第1の要素です。即ち、聖なる人々（会衆）の存在こそが、聖なる物（聖礼典）の使用を生み、聖なるお方を神とするのです。ですから、教会とは建物でも、教派でも、教会組織でもなく、神によって集められた「聖なる人々」です。

そして、この聖なる人々である私たちが神の恵みを受取る手段、それが御言葉と洗礼と聖餐です。この神の恵みを受け取る手段と呼ばれる3つは、同等の位置を持ち、聖餐は見える御言葉と言われます。そして、礼拝におけるこの3つの中心（み言葉、洗礼、聖餐）を目に見える形で示すものが朗読台（説教台）・洗礼盤・聖卓です。朗読台（説教台）・洗礼盤・聖卓は目に見える形において、礼拝堂に3つの中心を形作るのです。

## 2) 配置の実践

### A 洗礼盤

歴史的には洗礼盤は会堂の入り口に設置されてきました。なぜならば、洗礼を授けられた者が礼拝堂の中に入り、礼拝において聖餐に与ることができたからです。そして、この洗礼から聖餐へという流れを、礼拝堂の構造そのものが表してきました。

洗礼は人生におけるたった一度の出来ごとです。そして、洗礼は私たちとイエス・キリストを結びつける確かな約束のしるしです。ですから、礼拝堂に入る時、私たちはその確かな約束を思い起こします。洗礼盤を目にし、自分の指を洗礼盤の水に浸すことができます。また、その指で自分自身の体の上に十字架を刻んでも良いです。この行為は私たち自身の洗礼を想起させます。洗礼によって私たちはキリストと共に死に、キリストと共に生きるのです。（ローマの信徒への手紙6章4節）

### B 聖卓

聖餐は繰り返し行われる入信儀礼の一部として理解されます。洗礼で受けた恵みを、私たちは毎週の礼拝において繰り返し受け取ります。聖卓は最後の晩餐でイエス様が弟子たちと共に囲んだテーブルを象徴しています。ルターは言います。「キリストの礼拝は、最後の晩餐に近づけば近づくほどキリスト教的になる。」聖卓は私たちがキリストの体と血とを食する食卓です。ですから、食卓の上に、それ以外のものを置く必要はありません。聖餐のために、聖卓は整えられておくべきです。献金かごや花は各々相応しい場所を設けることが良いでしょう。

### C 朗読台（説教台）

私たちは「聖書朗読」と「説教」を通して、神の言葉を聞きます。そして、「聖書朗読」と「説教」は一つの目に見えるシンボルを持つことが出来ます。一つの朗読台（説教台）を用いて、「聖書朗読」と「説教」を行うことはできます。

しかし、これら実践の全てを“法”にすべきではありません。礼拝堂の構造や各々の配置を考慮し、選択できます。洗礼盤と聖卓と朗読台（説教台）は、礼拝の3つの中心を、目に見える形で礼拝堂内に形作ります。目に見えない神の愛と恵みは、目に見えるものを用いて、礼拝において体験されるのです。

（平岡仁子）

## 信徒の礼拝奉仕

### ○概論

礼拝は、神が「招き」、神が「みことば」を語り、神が「聖餐」によって養い、神が私たちを、再び「派遣」される出来事です。救いの恵みを受けて感謝する共同体として、この礼拝に与かり、参与します。そして、だからこそ信仰によって、そのことへの賛美と祈りを、私たちは共同体として、礼拝での応答として行うのです。恵みを受ける、一見、私たちはただ受け身で、積極的な参与は二の次でもよいかのように思いがちです。しかし、日々新たに福音を聞き、罪の赦しの恵みを聞くからこそ、礼拝への積極的な参与と奉仕が、喜びをもってなされなければなりません。何よりそれが「福音」が明瞭に証される伝道なのです。礼拝が起こるところ、そこでは常に宣教がなされ、私たち礼拝者の存在そのものが伝道となっている、そのことを覚えて、まず賛美の声をあげ、祈り、式文を共に唱え、応答していく礼拝者であることを忘れてはなりません。「信徒の礼拝奉仕」はそこにつきます。

讚美歌は、とりわけ重要な「信徒の奉仕」です。その日のテーマ、みことば、応答等、相応しい内容の歌が選ばれています。その「ことば」にまず耳を傾けること、聴くことをこころがけます。未知の曲や難しい場合、音楽に気をとられて内容が分からないということがないようにします。また、歌うことで、みことばを聴くのと同時に、隣人に伝えていることも覚えましょう。共に「みことば、信仰」を分かち合い、宣べ伝える会衆の説教が「讚美歌」なのです。詩編、式文、祈りの応答等も同じです。共に心と声を合わせて信仰共同体がそこに表わされます。礼拝に参与する喜びと恵みがそこにあります。

以下は、具体的な事柄に触れますが、もとより、個別の教会では、もっと多様な働きが様々になされていることと思います。それぞれに相応しい奉仕がなされることを期待します。

### ○個別の奉仕

#### 1. 当番・奉仕者の服装

特に定められてはいませんが、衆目の集まる場に立つのですから、当番や担当の際は、それにふさわしい常識的なことが考慮されるでしょう。アルバ、サープレス等の特別な式服が用意されることもあるでしょう。

#### 2. ろうそくの点火・消灯

礼拝の開始にあたって、聖卓等のろうそく点火が事前に、あるいは前奏中に行われます。「ろうそく」はキリストの臨在の象徴です。この場におられる主を証しする相応しい仕方になされます。入堂に際しても、時期や方法も様々ですが、司式者との連携がなされなければなりません。

#### 3. 奏楽者

特別な賜物が与えられ、礼拝の奏楽を担うのはすばらしいことです。鍵盤楽器が主ですが、それ以外の楽器で参与することもあるでしょう。準備等、大変なことかもしれませんが、会衆をリードし、司式者と共に礼拝を担い司る大切な役目です。殊に、歌唱を支え、リード

することは、奏楽者の重要な務めです。難しく完璧に演奏できない場合も、まず、歌唱のリードということを第一に考慮するのが大切です。また、司式者との連携、協力も忘れてはならないことです。予め、よく話し合っ準備することが求められます。

#### 4. 聖書朗読

礼拝における聖書朗読は、神の言葉の告知として最も重要な働きです。当番・担当者は、予めその箇所を熟読することはもちろん、発声や速度を含め明瞭な朗読を心がけます。また、忘れがちなのは、マイクロフォン等の使用にも十分配慮して、聴きやすい朗読に努めます。聖書の箇所や頁数等のアナウンスは、個別の教会で様々ですが、必ずしも全員が聖書を開く必要はなく、「聞く」、そのための朗読であることを忘れてはなりません。

#### 5. 説教の代読や説教録音の使用

牧師不在時に「説教原稿」代読の奉仕がなされる場合もあります。聖書朗読と同じことが言えますが、予め内容に即して、段落や区切り等を考慮して臨むことが求められます。

また、予め録音された媒体（テープ、ビデオ、CD、DVD等）の使用や、あるいは、同時配信によるモニター画面での礼拝も試みられ、行なわれる状況もあります。責任ある準備態勢を整え、事前の準備に心がけましょう。

#### 6. 献金

当番は、会衆席を回りますが、予め準備しておくことはもちろん、移動等のために相応しい席に座り滞りなく進めるようにします。

#### 7. 教会の祈り

自由な祈りは、聖霊の導くままになされるものですが、当番は、予め準備をしておくことも必要です。個人的なことではなく、「教会の祈り」として、すべてには触れられませんが、共同体のこと、課題、地区や教区、全体教会の課題、社会や世界の事柄も考慮しておきます。ただし、教会員個人の事柄については、プライバシー等の配慮も必要です。予め、祈りの課題にしてよいかどうかを当事者や教職と相談しておきます。

#### 8. 配餐補助

①聖餐式の中での、配餐補助（パンやブドウ酒の配餐）は、その是非も含め、全体教会で共通理解を得ていく途上かと思われます。既に、行なわれている教会もあるかと思いますが、行き当たりばったりではなく、担当する者は、当番として予め決められた担当者とするのが望ましいと思われます。

②礼拝前に、「聖餐の準備」として、パンとブドウ酒（ブドウジュース）等の用意をすることもあるかもしれません。また、礼拝後の片付けを担うこともあります。ぞんざいに扱うことなく、丁寧に慎みをもって行うことが大切です。

③聖餐用具の準備、片付けについても、その取扱いは慎重に行わなければなりません。

### ○信徒礼拝における司式

#### 1. 司式と司会

教職減少の中、信徒が礼拝の司式をする場合もあります。心得は、上記「聖書朗読」等の

延長で考えますが、大切なのは、ただの「司会」、アナウンス係ではなく、「式を司る」という役目だということです。神さまから託された教会の礼拝という務め、教職（牧師）が委ねられているものを、その日は信徒が担っているのです。式文を用いたり、略式になったりしますが、神の業、教会の働きの「礼拝の司式」である心構えで臨みます。

## 2. 服装

司式にふさわしい服装を、公の人の前に立つという常識的な範囲で考慮します。式服の着用もなされてかまいません。

## 3. 所作、その他

不自然にならないよう特別な所作、大袈裟な発声は必要ありませんが、落ち着いて明瞭な、聞き取りやすい語り（歌唱）が求められます。立ち居振る舞いも、自信なさげではなく、たとえ間違えても、堂々としておくことが大切です。普段から、担当者は、気を付けて牧師の所作を参考にしておくといいでしょう。

また、最後の「祝福（祝祷）」について、信徒礼拝の場合は、「わたしたち」にすべきだとの意見もありますが、その式の司式者が、礼拝における神の祝福を語るのですから、式文のまま「あなたがた」と告げて一向にかまいません。

## ○礼拝（教会）の奉仕

1. 礼拝は、教会の業そのものです。礼拝そのものに関わらなくても、教会で行われる奉仕は、究極的にすべてが「礼拝の奉仕」です。以下のことは、各教会では様々に担われているかと思えます。それぞれに話し合っ、相応しい分担がなされることが望ましいと思えます。

2. 受付、掃除、お花、看板、聖餐式準備、教会日誌、送迎

3. 礼拝では、必要に応じて通訳、手話通訳、要約作成、録音、音響・プロジェクター等の使用が考慮されます。

4. 聖歌隊（賛美奉仕）

礼拝での賛美のリード、賛美奉仕が、特別のグループでなされることは素晴らしいことです。ただ、単なる賜物をもったものの自己満足ではなく、礼拝への奉仕ということを忘れずに、奏楽者や司式者との緊密な連絡と話し合いが必要なのは言うまでもありません。

5. 高齢者配慮

送迎の奉仕、音響やプロジェクター、週報等の拡大等、様々な配慮が考えられます。

6. 新来会者配慮

新来会者が、受付で聖書や讃美歌、式文や献金袋を渡され、その後、一人ぼつねんと途方に暮れている、ということはないでしょうか。初めての方は、礼拝のすべてが未知なものです。過度な手助けを求めない場合もありますから、注意が必要ですが、「何か助けが必要ですか」ということを聞くことをおろそかにしないでほしいものです。ことに、新来者が、礼拝の前から来るとは限りません。途中で来会された場合、牧師は司式中には対応できません。後部に座る信徒の配慮、気配りはとても重要であることを覚えましょう。

（松本義宣）

## 「なぜ式文を改定するのか」

キリスト者が集う中心に位置するものが、新しいものに置き換わるというようなことは起こりません。信仰的にもこの点をまず確認することは肝要です。神の約束は永遠です。御言葉は固く立っています。私たちはそれに委ねています。福音説教は風のように揺らぎません。洗礼のとき、聖霊によって私たちを招き、聖なる晩餐を用意してくださるイエス・キリストは、「きのうも今日も、また永遠に変わることはない方」です（ヘブライ 13章8節）。恵みの手段を囲むべく、私たちを招かれるこの同じ神だけが、「見よ、新しいことをわたしは行う」（イザヤ 43章19節）、「見よ、わたしは万物を新しくする」（黙示録 21章5節）と語りうる唯一のお方です。

深く歴史に刻まれた伝統を、神から授かった賜物として信頼して受け取り、恐れず神の未来と神が織りなす新しい出来事へと向かうことが、キリスト者の信仰的実践といえます。

イザヤ書 43章 15-21節にあるように、かつて起こった「古いこと」が新しい脈絡で、新しい要請の中で、新しい方法によって何度でも繰り返されること、それが神の「新しいこと」です。神はかつてエジプトの囚われ人を、海を渡って連れ出しました。しかしながら「昔のことを思いめぐらすな」と預言者イザヤは言います。神は、囚われ人を砂漠を経て導き、水を飲ませてくださいます。奪い取ったりはしないのです。

昔のことを新しく、これが式文の改定です。これこそ改定すべき理由といえます。神の約束の言葉を現代に語るために、妨げるものを置かず、キリストの言葉と聖礼典を真ん中にして現代に届けるために、記憶から消えてしまいそうな古き良きものを取り戻し、新しくして力強く現代に語りかけるために、集う信徒、牧師、女性、男性、青年、子ども、高齢者一人ひとりが、イエス・キリストを喜び祝うという神秘の体験に加わってもう一度元気を取り戻すために、さらには御言葉と聖礼典の祝福に与る日本のキリスト者そして世界の兄弟姉妹をひとつに結ぶ絆を強めるために、改定をしていく必要があります。

式文改定は、井戸や泉の掃除にたとえられるでしょう。聖書、説教、罪の赦し、聖餐、洗礼という神の賜物は、山から流れてきた新鮮な命の水のようで、その水は安全な深い井戸に蓄えられています。けれども年を重ねるうちに井戸には雑草が生え、バケツが井戸に落ちこちたり、はたまたゴミが溜まって水を汲めなくなったりするので、時々掃除しなければなりません。私たちには水を生み出すことはできませんが、水を流れやすく汲みやすくすることならできます。そうすることで世の人々の渇きを潤します。比喻を使わずそのまま言えば、説教はいつも新鮮でなければならず、聖書の翻訳も信仰に沿ってわかりやすくあるべきだし、洗礼を思い起こし、祝福を豊かにし、聖餐を教会生活の中心に置かねば

なりません。会衆皆が熱心に世界の必要を満たすために祈り、福音宣教と奉仕に遣わされていけるように、神の恵みは視界から消えてはなりません。また礼拝の中心がぼやけてはなりません。

教会の歴史が語る古い教えによると、次のようにも言えます。状況が新しくなったにもかかわらず同じことを同じように言うのは、間違っただけを言っていることになりかねません。古くから伝えられた真理の言葉を正しく忠実に伝えるには、新たな方法で語る必要があります。出エジプトの神はバビロン捕囚の民を帰還させた神でもあります。同じでありながら新しいのです。この同じ神が、宗教改革が起きたときのマルティン・ルターの神であり、日本に宣教する神なのです。

いずれの場合も、古さが新たに造り変えられたのです。この救いの神が絶えず新たな方法で、今日、教会における十字架と復活の福音の神でもあります。式文改定は、こうして三位一体の神の現臨を目で確かめ、耳で確かめ、味わい、神と共に生きるための手助けとなります。

式文改定に向けてひたむきに努力する日本のルーテル教会は、新たにするという呼びかけに応えているのです。新しい典礼用資料とハンドブックは、皆さんの教会という泉をきれいにするためであり、刷新のために大変役に立ちます。改定作業を進めるにあたって、以下のことを申し添えておきたいと思います。

- ・主日礼拝式文は、4部門のオーダー、オールドで成り立っています。それはルカ24章13-35節にあるイエス・キリストのストーリーに呼応していて、エマオ途上の弟子たちへの挨拶と招き、聖書の解釈、食事の提供、そして主が復活したことを走って伝える行く理由がそこにあるのです。それが「招き」、「みことば」、「聖餐」、「派遣」という古来からのエキュメニカルな順序（オーダー）であり、式文改定は、その流れをリニューアル（装い新たに）するということです。
- ・従来の式文の言葉と音楽も新しい讃美歌も、この改定されたオールドに沿ったものであるべきです。
- ・エキュメニカルで世界標準の改訂共通聖書日課（RCL）を用いることで、聖書朗読はさらに深まり、ルターの言葉の通り「キリストを運ぶ」、「キリストを説教する」ことができます。
- ・牧師たちは、三つの主日朗読テキストに注意を向けて、それらが共通して語りかけてくるメッセージを探りつつ、説教でキリストを告げ知らせます。

- ・第一朗読に続いて詩編が用いられ、三年周期の聖書日課すべてに見合った集禱（集いの祈り）が用意されることを心がけてください。
- ・ルター派信仰告白で謳われているように聖餐が毎週行われ、毎週定期的にイエス・キリストと御言葉と聖礼典において出会う喜びをいただくことを心がけてください。
- ・牧師が司式して主の食卓において会衆と向き合い、感謝の祈りとキリストの約束の御言葉を告知することを心がけてください。
- ・洗礼を受けた人々、すなわちルターの言う「祭司的な神の民」、「信徒」が礼拝の進行を手伝い、最初のふたつの聖書朗読を担う、執りなしの祈りを受け持つ、配餐を手伝う、音楽奉仕を手伝うことを心がけてください。
- ・礼拝の最後のところで派遣の部の一部として、必要を欠く人々のために捧げものが集められます。それは、現存する最古のキリスト教礼拝にも記されています。ルターが教えたこと、すなわちキリストがわたしたちに福音を与え、愛のうちに施してくださるのだから、わたしたちも隣人に向かうということを表すために、これが為されるよう心がけてください。
- ・礼拝が常に洗礼を思い起こすことから始まるということ、入り口に水を張った洗礼盤があること、洗礼式があるときだけでなく、毎週日曜日にそこにあり、牧師が傍らに立ち、洗礼盤を挟んで会衆と向き合いながら罪の告白と赦し、そして洗礼の想起が行われることを心がけてください。
- ・平和の挨拶を回復すること、「わたしたちは信じます」と信仰告白をすること、礼拝のおしまいで派遣の言葉があること、洗礼準備と洗礼のお祝い、古くからあるが驚くほどに新鮮なグレート・イースター・ヴィジル（主の復活の夜）を大切にすること、そしてハンドブックもそうですが、各教会で礼拝の賜物について教えがなされ、学習会があり、そこで話しあうことを心がけてください。
- ・これらはその多くが古きを新しくすることです。聖餐式の感謝の祈りのとき、牧師が聖壇や聖卓を挟んで会衆と向き合うことは、ルターも望んでいたことです。初代教会で行われていたことを現代に復活させることで、聖霊の力によってイエス・キリストがわたしたちのただ中におられ、私たちという福音の神秘の共同体に招かれていることを、現代においてもはっきりと示してください。

- ・ 典礼の刷新が行われるところであれば世界中どこでも、これらの多くがあてはまります。改訂共通聖書日課（RCL）は、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、オセアニアなど世界の多くの教会で採用されている主日のユーカリストのための聖書朗読様式です。
- ・ 初代教会の出来事が新たにされたという事例が日本にはあります。礼拝の最後に派遣の一部として、必要を欠くところへ届けるという主旨の献金を置くという素晴らしいアイデアを示したのが、日本のルーテル教会です。これは、2世紀の殉教者ユスティノスの礼拝にあり、かつルターの考えを具体化しており、コミュニオン（礼拝共同体）が隣人への配慮とどう関連しているかを示しています。世界に対する良い例となり得ます。
- ・ 言うまでもないですが、これらの提案はすべてキリストの賜物についてのこと、すなわち教会生活の中心にあつて、絶えず新しくされる自由で新鮮な、神様の生きた水が流れる泉、すなわち御言葉と聖餐に関することなのです。

日本のルーテル教会の式文改定作業を神様が祝福してくださいますように。この働きでわたしたちにも道を示してくれますように。

ゴードン・W・レイスロップ  
礼拝学名誉教授 フィラデルフィア

（翻訳 浅野直樹）

\*レイスロップ G. W. 略歴

アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）牧師、神学博士。

北米典礼学会（North America Academy of Liturgy）会長 1984

国際典礼学会（Societas Liturgica）会長 2011-2013

著書多数

「21世紀の礼拝—文化との出会い」（来日講演）



# 主日礼拝式文 改定版

2016. 2. 23

常議員会承認案

## 招き

招き

(\*礼拝堂の入口または洗礼盤の横に立ち、これを行う。)

司式：<sup>かみ</sup>神は、<sup>ひと</sup>すべての人が<sup>すく</sup>救いの恵みに<sup>めぐ</sup>与るよ  
<sup>あずか</sup>うに、<sup>れいはい</sup>礼拝に<sup>まね</sup>招いてくださいました。

会衆：<sup>わたし</sup>私たちは<sup>まね</sup>招かれて、ここにいます。

司式：<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の<sup>みな</sup>御名によって。

会衆：アーメン。

司式：<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の<sup>みな</sup>御名によって。

会衆：アーメン。

司式：<sup>あわ</sup>憐れみ<sup>ふか</sup>深い<sup>かみ</sup>神さま。

<sup>わたし</sup>私たちは<sup>さんび</sup>あなたを<sup>せい</sup>賛美し、<sup>みな</sup>聖なる御名を

<sup>あが</sup>崇めます。<sup>わたし</sup>私たちの<sup>こころ</sup>心を開き、<sup>ひら</sup>聖霊によ  
<sup>きよ</sup>って清めてください。

<sup>しゅ</sup>主イエス・キリストによって。

会衆：アーメン。

告白

司式：<sup>かみ</sup>神の<sup>みまへ</sup>御前で<sup>わたし</sup>私たちの<sup>つみ</sup>罪を<sup>こくはく</sup>告白し、<sup>こころ</sup>心を  
<sup>あ</sup>合わせて<sup>ゆる</sup>赦しを<sup>もと</sup>求めましょう。

一同：<sup>かみ</sup>神さま。

<sup>わたし</sup>私たちは<sup>おも</sup>思いと<sup>ことば</sup>言葉、<sup>おこな</sup>行いと<sup>おこた</sup>怠り、ま  
<sup>む</sup>た無関心によって、<sup>かんしん</sup>あなたから<sup>とお</sup>遠く<sup>はな</sup>離れ、  
<sup>み</sup>御旨に<sup>むね</sup>背いて<sup>そむ</sup>きました。今、<sup>いま</sup>ここに<sup>つみ</sup>罪を  
<sup>こくはく</sup>告白します。

司式：<sup>かみ</sup>神と<sup>かいしゅう</sup>会衆の前で、<sup>わたし</sup>私たちの<sup>つみ</sup>罪を<sup>こくはく</sup>告白しま  
しょう。

全員：<sup>かみ</sup>神さま。<sup>つみ</sup>罪に<sup>とら</sup>囚われている<sup>わたし</sup>私たちは、<sup>おも</sup>み  
<sup>じゆう</sup>ずから<sup>おも</sup>自由になることはできません。思い  
<sup>ことば</sup>と<sup>おこな</sup>言葉、<sup>おこた</sup>行いと<sup>む</sup>怠り、また<sup>かんしん</sup>無関心によっ  
<sup>みまへ</sup>て、<sup>つみ</sup>御前に<sup>もの</sup>罪ある者です。<sup>わたし</sup>私たちは、<sup>こころ</sup>心を  
<sup>つ</sup>尽くして<sup>あい</sup>あなたを<sup>りんじん</sup>愛さず、<sup>じぶん</sup>隣人を自分の  
ように<sup>あい</sup>愛しませんでした。<sup>み</sup>御子<sup>こ</sup>イエス・キ  
リストの<sup>あ</sup>ゆえに、<sup>わたし</sup>私たちを<sup>あわ</sup>憐れんでくだ  
さい。<sup>わたし</sup>私たちを<sup>ゆる</sup>赦し、<sup>あら</sup>新たに<sup>みちび</sup>し、<sup>みちび</sup>導いて  
ください。<sup>み</sup>御旨を<sup>よろこ</sup>喜び、<sup>みち</sup>あなたの<sup>あゆ</sup>道を歩  
<sup>みな</sup>み、<sup>えいこう</sup>御名の<sup>もの</sup>栄光を<sup>あらわ</sup>あらわす者としてくださ  
い。アーメン。

(黙祷)

赦し

司式：<sup>めぐ</sup>恵みの<sup>かみ</sup>神さま。

会衆：<sup>わたし</sup>私<sup>ゆる</sup>たちを赦してください。

司式：<sup>かみ</sup>神は、<sup>みこ</sup>御子イエス・<sup>じゅうじか</sup>キリストの十字架に  
よって<sup>わたし</sup>私<sup>ゆる</sup>たちを赦し、<sup>せんれい</sup>洗礼の<sup>やくそく</sup>約束により  
<sup>あら</sup>新たに<sup>う</sup>生まれさせ、<sup>えいえん</sup>永遠の<sup>いのち</sup>命へと<sup>みちび</sup>導いて  
くださいます。

<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の<sup>みな</sup>御名によって。

会衆：アーメン。

司式：<sup>ぜんのう</sup>全能の<sup>かみ</sup>神は、<sup>みこ</sup>御子イエス・<sup>し</sup>キリストを死に  
<sup>わた</sup>渡し、その<sup>し</sup>死によって、<sup>わたし</sup>私<sup>ゆる</sup>たちのすべて  
の<sup>つみ</sup>罪を赦してくださいます。

(<sup>キリスト</sup>に<sup>ゆだ</sup>委ねられた<sup>つと</sup>務めにより、<sup>わたし</sup>私  
は、<sup>つみ</sup>罪の赦しを<sup>あなた</sup>あなたたちに<sup>せんげん</sup>宣言しま  
す。)

<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の<sup>みな</sup>御名によって。

会衆：アーメン。

招きの歌

(\*歌いつつ入堂、という形をとることもできる)

キリエ

①

司式：<sup>へいあん</sup>平安の<sup>いの</sup>うちに祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>かみ</sup>神からの<sup>へいあん</sup>平安と<sup>わたし</sup>私<sup>すく</sup>たちの<sup>いの</sup>救いのために祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>せ</sup>世界の<sup>へいわ</sup>平和と<sup>かみ</sup>神の<sup>きょうかい</sup>教会の<sup>せいちょう</sup>成長と<sup>しゅ</sup>主の<sup>たみ</sup>民の<sup>いっし</sup>一致のために祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>せい</sup>この<sup>きょうかい</sup>聖なる<sup>つど</sup>教会と<sup>れいはい</sup>ここに<sup>あずか</sup>集い<sup>もの</sup>礼拝に<sup>いの</sup>与る者のために祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>めぐ</sup>恵みの<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>わたし</sup>私<sup>すく</sup>たちを<sup>まも</sup>救い、<sup>たす</sup>守り、<sup>あわ</sup>助け、憐れんでください。

会衆：アーメン。

②

司式：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>キリスト</sup>よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

会衆：<sup>キリスト</sup>よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

②-2

司式もしくは一同：

主よ、憐れんでください。

キリストよ、憐れんでください。

主よ、憐れんでください。

グロリア

司式：いと高きところには栄光、神に。

一同：地には平和、み心にかなう人々に。

主を崇め、主を仰ぎ、主を拝み、主を称えます。

主なる神、天の王、全能の父。あなたの栄光に感謝します。

主なる神、神の小羊、父のひとり子、主イエス・キリスト。

世の罪を取り除く主。私たちを憐れみ、祈りを聞いてください。

父の右におられる主。私たちを憐れんでください。

あなただけが聖なる主、いと高きイエス・キリスト、

あなたは聖霊と共に、父なる神の栄光のうちに。

アーメン。

つどいの祈り

司式：祈りましょう。

・・・私たちの主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

会衆：アーメン。

**みことば**

司式：みことばを聞きましょう。

第一の朗読

朗読者：本日の第一の朗読は、「書名〇〇」〇〇章〇〇節から始まります。

(朗読) 第一の朗読を終わります。

## 応答唱

(その日のために選ばれている詩編、栄唱等を、朗読、交読、交唱、またふさわしい讃美歌などで唱える。

また、ここで詩編、栄唱等を用いない場合は、福音書朗読前の讃歌、または説教後のみことばの歌に代えて用いてもよい。)

## (栄唱)

父と子と聖霊の神に栄光、初めもいまも、えいえんにかぎりなく。アーメン。

## 第二の朗読

朗読者：本日の第二の朗読は、「書名〇〇」〇〇章〇〇節から始まります。

(朗読) 第二の朗読を終わります。

## 讃歌 (「ハレルヤ／キリスト詠唱」または讃美歌)

ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ。

\*四旬節、受難週には特に次の詠唱を用いる。

キリストは、へりくだり、死に至るまで、十字架の死に至るまで従順でした。

## 福音書の朗読

朗読者：本日の福音は「書名」〇〇章〇〇節から始まります。

会衆：栄光は主に

朗読者：(朗読) 福音書の朗読を終わります。

会衆：賛美はキリストに

## 説教

## みことばの歌

## 信仰告白

(ニケヤ信条または使徒信条を用いる。)

司式) ニケヤ信条によって、信仰の告白を共にしましょう。

会衆) 天と地、すべての見えるものと見えないものの造り主、全能の父である 唯一の神を私は信じます。唯一の主イエス・キリストを私は信じます。主は神のひとり子であって、全ての世に先だって父から生まれ、神の神、光の光、まことの神のまことの神、造られたのではなく、生ま

れ、父と同質であって、すべてのものは主によって造られました。主は私たち人間のため、また私たちの救いのために天から下り、聖霊により、おとめマリアから肉体を受けて人となり、ポンテオ・ピラトのもとで私たちのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書のとおり三日目に復活し、天に上られました。そして父の右に座し、栄光のうちに再び来て、生きている人と死んだ人とをさばかれます。その支配は終わることがありません。主であって、いのちを与える聖霊を私は信じます。聖霊は父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられます。また、預言者をとおして語られました。唯一の、聖なる、公同の、使徒的な教会を私は信じます。罪の赦しの唯一の洗礼を私は受け入れます。死人の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。(アーメン)

司式) 使徒信条によって、信仰の告白を共にしましょう。

会衆) 天地の造り主、全能の父である神を私は信じます。そのひとり子、私たちの主イエス・キリストを私は信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府に下り、三日目に死人のうちから復活し、天に上られました。そして全能の父である神の右に座し、そこから来て、生きている人と死んだ人とをさばかれます。聖霊を私は信じます。また聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活と永遠のいのちを信じます。(アーメン)

## 教会の祈り

司式) 祈りましょう。

—————  
(諸祈祷)  
—————

# 司式者または他の祈祷者はその日に必要な祈りを祈る。  
教会、福音の宣教、平和と正義、貧困、抑圧、孤独、癒し、和解、その日の特別な事柄等

司式)・・・各項目の祈りの最後を「キリストのみ名により」で結ぶ

会衆)「主よ、聞いてください」または「主よ、憐れんでください」で応答する

## 結びの祈り

司式) 恵みの神さま。

あなたの憐れみに信頼し、私たちのすべての祈りを委ねます。私たちの救い主、イエス・キリストによって祈ります。

会衆) アーメン。

## 平和の挨拶

司式：主しゅの平和へいわがみなさんと共にともにありますように。

会衆：またあなたと共にとも。

司式：互いに平和へいわの挨拶あいさつを交かわしましょう。

(\*「主しゅの平和へいわ」と言いいながら挨拶あいさつを交かわす。)

## 聖餐

### 聖餐の歌

### 序詞

司式：主しゅが共にとも、おられるように

会衆：またあなたと共にとも

司式：心こころを高たかくあげて、主しゅを仰あおぎましょう。

会衆：主しゅを仰あおぎます。

司式：主しゅに感謝かんしゃしましょう。

会衆：感謝かんしゃと讃美さんびをささげます。

### その日の序詞

司式) 聖せいなる主しゅ 全能ぜんのうの父ちち 永遠えいえんの神かみ様さま。

いづどこでも、あなたに感謝かんしゃするのは、正しい務ただめであり、また私わたしたちの喜よろこびです。

・・・(特別序詞)・・・

いま ちじょう 地上ちじょうのすべての教会きょうかいは、あなたみなの御名みをあがめ、永遠えいえんの讃美さんびを天てんの御使みつかいと聖徒せいとたちと共にともに、声こえをああわせて歌うたいます。

### サントゥス

一同：聖せいなる、聖せいなる、聖せいなる力ちからの主しゅ。

天てんと地ちに、主しゅの栄光えいこうは満みちています。

いと高たかきところにホサナ。

主しゅの御名みなによって来こられる方かたに、祝しゅく福ふくがあるように。

いと高たかきところにホサナ。

## 設定

司式：私<sup>わたし</sup>たちの主<sup>しゅ</sup>イエス・キリストは渡<sup>わた</sup>される夜<sup>よる</sup>、パン<sup>と</sup>を取り、感謝<sup>かんしゃ</sup>し、これ<sup>さ</sup>を裂<sup>でし</sup>き、弟子<sup>あた</sup>たちに与<sup>あた</sup>えて言<sup>い</sup>われました。「取<sup>と</sup>って食<sup>た</sup>べなさい。これ<sup>あた</sup>はあなたがたのために与<sup>あた</sup>えるわたしのからだである。わたしの記念<sup>きねん</sup>のため、これ<sup>おこな</sup>を行<sup>しよくじ</sup>いなさい」。食事<sup>さかづき</sup>ののち、杯<sup>おな</sup>をも同じ<sup>い</sup>ようにして言<sup>い</sup>われました。「取<sup>と</sup>って飲<sup>の</sup>みなさい。これ<sup>つみ</sup>は罪<sup>ゆる</sup>の赦<sup>ゆる</sup>しのため、あなたがた<sup>おお</sup>と多く<sup>ひと</sup>の人々<sup>びと</sup>のために流<sup>なが</sup>す、わたしの血<sup>ち</sup>による<sup>あた</sup>ら<sup>けいやく</sup>新しい<sup>きねん</sup>契約<sup>おこな</sup>である。わたしの記念<sup>きねん</sup>のため、これ<sup>おこな</sup>を行<sup>しよくじ</sup>いなさい」。

会衆：アーメン

(現行式文の2と3を検討したものを併記する。)

## 主の祈り

一同：天<sup>てん</sup>におられるわたしたちの父<sup>ちち</sup>よ、  
み名<sup>な</sup>が聖<sup>せい</sup>とされますように。  
み国<sup>くに</sup>が来<sup>き</sup>ますように。  
みこころ<sup>てん</sup>が天<sup>おこな</sup>に行<sup>い</sup>われるとおり  
地<sup>ち</sup>にも行<sup>い</sup>われますように。  
わたしたちの日<sup>ひ</sup>ごとの糧<sup>かて</sup>を  
今日<sup>きょう</sup>もお与<sup>あた</sup>えください。  
わたしたちの罪<sup>つみ</sup>をおゆるしくください。  
わたしたちも人<sup>ひと</sup>をゆるします。  
わたしたちを誘惑<sup>ゆうわく</sup>に陥<sup>おちい</sup>らせず、  
悪<sup>あく</sup>からお救<sup>すく</sup>いください。  
国<sup>くに</sup>と力<sup>ちから</sup>と栄光<sup>えいこう</sup>は、永遠<sup>えいえん</sup>にあなたのもので  
す。  
アーメン

天<sup>てん</sup>の父<sup>ちち</sup>よ。  
み名<sup>な</sup>があがめられますように。  
み国<sup>くに</sup>が来<sup>き</sup>ますように。  
みこころ<sup>てん</sup>が天<sup>おこな</sup>で行<sup>い</sup>われるように、  
地上<sup>ちじょう</sup>でも行<sup>い</sup>われますように。  
私<sup>わたし</sup>たちに今日<sup>きょう</sup>もこの日<sup>ひ</sup>の糧<sup>かて</sup>を  
お与<sup>あた</sup>えください。  
私<sup>わたし</sup>たちに罪<sup>つみ</sup>をおか<sup>おか</sup>した者<sup>もの</sup>を赦<sup>ゆる</sup>しましたから、  
私<sup>わたし</sup>たちの犯<sup>おか</sup>した罪<sup>つみ</sup>をお赦<sup>ゆる</sup>しくください。  
私<sup>わたし</sup>たちを誘惑<sup>ゆうわく</sup>から導<sup>みちび</sup>き出して、  
悪<sup>あく</sup>からお救<sup>すく</sup>いください。  
み国<sup>くに</sup>も力<sup>ちから</sup>も栄光<sup>えいこう</sup>も とこしえにあなた  
のものだからです。  
アーメン

・NCC 統一訳 (1971年)

## アグヌス デイ

一同：世<sup>よ</sup>の罪<sup>つみ</sup>を取り除<sup>と</sup>く神<sup>のぞ</sup>の小羊<sup>かみ こひつじ</sup> 憐れ<sup>あわ</sup>んでください。  
世<sup>よ</sup>の罪<sup>つみ</sup>を取り除<sup>と</sup>く神<sup>のぞ</sup>の小羊<sup>かみ こひつじ</sup> 憐れ<sup>あわ</sup>んでください。  
世<sup>よ</sup>の罪<sup>つみ</sup>を取り除<sup>と</sup>く神<sup>のぞ</sup>の小羊<sup>かみ こひつじ</sup> 平和<sup>へいわ</sup>をお与<sup>あた</sup>えください。

## 聖餐への招きと配餐

司式：洗礼の礼典にあずかったかたは、聖卓へお進みください。

(上記以外に聖餐への招きのふさわしい言葉や洗礼を受けていない人に配慮したをことば用いてもよい。)

司式：キリストの体です。

会衆：アーメン。

司式：キリストの血です。

会衆：アーメン。

## 配餐後の祝福

司式：私たちの主イエス・キリストの体と血とは、信仰によって、あなたがたを強め、守り、永遠のいのちに至らせてくださいます。

会衆：アーメン。

## 聖餐の感謝

司式：憐れみ深い神様。

この救いの賜物により、新たに力を与えてくださったことを感謝します。私たちがますます主を信じ、互いに愛し、仕え合うことができるようにしてください。あなたと聖霊と共にただ独りの神であり、永遠に生きて治められる御子、主イエス・キリストによって祈ります。

会衆：アーメン

## シメオンの賛歌

一同：今 私は 主の救いを見ました。主よ あなたは みことばのとおり しもべを 安らかに 去らせてくださいます。これは すべての民に 備えられた 救い \* 諸国民の心を ひらく 光、御民イスラエルの 栄光です。 \* 「すべての人」を用いることもできる



## 派遣

感謝の捧げもの

派遣の祈り

司式：世界の創り主、全能の神様。

イエス・キリストにより、私たちを一つの体として結び合わせてくださり感謝いたします。  
私たちを希望と忍耐と勇気で満たし、隣人を愛することができるようにしてください。今捧  
げられたものがあなたを証し、世界の人々に届けられますように。痛み悲しむ人々の隣人とし  
て、私たちを聖霊によって送り出してください。主イエス・キリストの御名によって祈りま  
す。

会衆：アーメン。

派遣の歌

祝福

司式：主があなたを祝福し、あなたを守られる  
ように。(一守られます)

主が御顔を向けてあなたを照らし、あなた  
に恵みを与えられるように。(一与えられ  
ます)

主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を  
賜るように。(一賜わります)

父と子と聖霊の御名によって。

会衆：アーメン。

司式：主イエス・キリストの恵みと、神の愛  
と、聖霊の交わりが、あなたがた一同  
と共にあるように。

会衆：アーメン。

派遣の言葉

司式：行きましょう。主の平和のうちに。

仕えましょう。主と隣人に。

会衆：(アーメン) 私たちは行きます。

神の助けによって。

司式：行きましょう。主の平和のうちに。

仕えましょう。主と隣人に。

会衆：私たちは分かち合います、恵みを。

伝えます、福音を。

# 主日礼拝式文（御言葉の礼拝）

2016. 2. 23  
常議員会承認案

## 招き

招き

（＊礼拝堂の入口または洗礼盤の横に立ち、これを行う。）

司式：<sup>かみ</sup>神は、<sup>ひと</sup>すべての人が<sup>すく</sup>救いの恵みに<sup>めぐ</sup>与るよう  
<sup>れいはい</sup>に、<sup>まね</sup>礼拝に招いてくださいました。

会衆：<sup>わたし</sup>私たちは<sup>まね</sup>招かれて、ここにいます。

司式：<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の御名によって。

会衆：アーメン。

司式：<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の御名によって。

会衆：アーメン。

司式：<sup>あわ</sup>憐れみ<sup>ふか</sup>深い<sup>かみ</sup>神さま。

<sup>わたし</sup>私たちは<sup>さんび</sup>あなたを<sup>せい</sup>賛美し、<sup>みな</sup>聖なる御名を<sup>あが</sup>崇  
<sup>め</sup>めます。<sup>わたし</sup>私たちの<sup>こころ</sup>心を開き、<sup>ひら</sup>聖霊によっ  
<sup>きよ</sup>て清めてください。

<sup>しゅ</sup>主イエス・キリストによって。

会衆：アーメン。

告白

司式：<sup>かみ</sup>神の御前で<sup>わたし</sup>私たちの<sup>つみ</sup>罪を<sup>こくはく</sup>告白し、<sup>こころ</sup>心を合  
<sup>ゆる</sup>わせて<sup>もと</sup>赦しを求めましょう。

一同：<sup>かみ</sup>神さま。

<sup>わたし</sup>私たちは<sup>おも</sup>思いと<sup>ことば</sup>言葉、<sup>おこな</sup>行いと<sup>おこた</sup>怠り、また  
<sup>む</sup>無関心によって、<sup>とお</sup>あなたから<sup>はな</sup>遠く<sup>み</sup>離れ、<sup>むね</sup>御旨  
<sup>そむ</sup>に背いてきました。今、<sup>いま</sup>ここに<sup>つみ</sup>罪を<sup>こくはく</sup>告白し  
ます。

司式：<sup>かみ</sup>神と<sup>かいしゅう</sup>会衆の前で、<sup>わたし</sup>私たちの<sup>つみ</sup>罪を<sup>こくはく</sup>告白しま  
しょう。

一同：<sup>かみ</sup>神さま。<sup>つみ</sup>罪に囚われている<sup>わたし</sup>私たちは、<sup>みず</sup>みず  
<sup>じゆう</sup>から自由になることはできません。<sup>おも</sup>思いと  
<sup>ことば</sup>言葉、<sup>おこな</sup>行いと<sup>おこた</sup>怠り、また<sup>む</sup>無関心によって、  
<sup>み</sup>御前に<sup>つみ</sup>罪ある者です。<sup>わたし</sup>私たちは、<sup>こころ</sup>心を<sup>つ</sup>尽く  
<sup>あ</sup>してあなたを<sup>あい</sup>愛さず、<sup>りんじん</sup>隣人を<sup>じぶん</sup>自分のように  
<sup>あい</sup>愛しませんでした。<sup>み</sup>御子イエス・キリスト  
<sup>わたし</sup>のゆえに、<sup>あわ</sup>私たちを<sup>わたし</sup>憐れんでください。<sup>わたし</sup>私  
<sup>ゆる</sup>たちを<sup>あら</sup>赦し、<sup>みちび</sup>新たにし、<sup>みちび</sup>導いてください。  
<sup>み</sup>御旨を<sup>よろこ</sup>喜び、<sup>みち</sup>あなたの<sup>あゆ</sup>道を<sup>みな</sup>歩み、<sup>みな</sup>御名の  
<sup>えいこう</sup>栄光を<sup>もの</sup>あらわす者としてください。アーメ  
ン。

（黙祷）

赦し

司式：<sup>めぐ</sup>恵みの<sup>かみ</sup>神さま。

会衆：<sup>わたし</sup>私<sup>ゆる</sup>たちを赦してください。

司式：<sup>かみ</sup>神は、<sup>み</sup>御子<sup>こ</sup>イエス・<sup>じゅうじか</sup>キリストの十字架によ  
<sup>わたし</sup>って私<sup>ゆる</sup>たちを赦し、<sup>せんれい</sup>洗礼の<sup>やくそく</sup>約束により<sup>あら</sup>新  
<sup>う</sup>たに生まれさせ、<sup>えいえん</sup>永遠の<sup>いのち</sup>命へと<sup>みちび</sup>導いてくだ  
さいます。

<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の<sup>みな</sup>御名によって。

会衆：アーメン。

司式：<sup>ぜんのう</sup>全能の<sup>かみ</sup>神は、<sup>み</sup>御子<sup>こ</sup>イエス・<sup>し</sup>キリストを<sup>わた</sup>死に渡  
し、その<sup>し</sup>死によって、<sup>わたし</sup>私<sup>つみ</sup>たちのすべての罪  
を<sup>ゆる</sup>赦してくださいます。

(<sup>ゆだ</sup>キリストに<sup>つと</sup>委ねられた<sup>わたし</sup>務めにより、私<sup>つみ</sup>は、  
<sup>ゆる</sup>罪の赦しを<sup>せんげん</sup>あなたたちに<sup>せんげん</sup>宣言します。)

<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいれい</sup>聖霊の<sup>みな</sup>御名によって。

会衆：アーメン。

招きの歌

(\*歌いつつ入堂、という形をとることもできる)

キリエ

①

司式：<sup>へいあん</sup>平安の<sup>いの</sup>うちに祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>かみ</sup>神からの<sup>へいあん</sup>平安と<sup>わたし</sup>私<sup>すく</sup>たちの<sup>いの</sup>救いのために祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>せ</sup>世界の<sup>へいわ</sup>平和と<sup>かみ</sup>神の<sup>きょうかい</sup>教会の<sup>せいちょう</sup>成長と<sup>しゅ</sup>主の<sup>たみ</sup>民の<sup>いっ</sup>一致のために祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>せい</sup>この<sup>きょうかい</sup>聖なる<sup>つど</sup>教会と<sup>れいはい</sup>ここに<sup>あずか</sup>集い<sup>もの</sup>礼拝に<sup>いの</sup>与る者のために祈りましょう。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>めぐ</sup>恵みの<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>わたし</sup>私<sup>すく</sup>たちを<sup>まも</sup>救い、<sup>たす</sup>守り、<sup>あわ</sup>助け、憐れんでください。

会衆：アーメン。

②

司式：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>あわ</sup>キリストよ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

会衆：<sup>あわ</sup>キリストよ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

司式：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

会衆：<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>あわ</sup>憐れんでください。

②-2

司式もしくは一同：

主よ、憐れんでください。

キリストよ、憐れんでください。

主よ、憐れんでください。

グロリア

司式：いと高きところには栄光、神に。

一同：地には平和、み心にかなう人々に。

主を崇め、主を仰ぎ、主を拝み、主を称えます。

主なる神、天の王、全能の父。あなたの栄光に感謝します。

主なる神、神の小羊、父のひとり子、主イエス・キリスト。

世の罪を取り除く主。私たちを憐れみ、祈りを聞いてください。

父の右におられる主。私たちを憐れんでください。

あなただけが聖なる主、いと高きイエス・キリスト、

あなたは聖霊と共に、父なる神の栄光のうちに。

アーメン。

つどいの祈り

司式：祈りましょう。

・・・私たちの主イエス・キリストのみ名によって祈ります。

会衆：アーメン。

**みことば**

司式：みことばを聞きましょう。

第一の朗読

朗読者：本日の第一の朗読は、「書名〇〇」〇〇章〇〇節から始まります。

(朗読) 第一の朗読を終わります。

## 応答唱

(その日のために選ばれている詩編、栄唱等を、朗読、交読、交唱、またふさわしい讃美歌などで唱える。

また、ここで詩編、栄唱等を用いない場合は、福音書朗読前の讃歌、または説教後のみことばの歌に代えて用いてもよい。)

## (栄唱)

父と子と聖霊の神に栄光、初めもいまも、えいえんにかぎりなく。アーメン。

## 第二の朗読

朗読者：本日の第二の朗読は、「書名〇〇」〇〇章〇〇節から始まります。

(朗読) 第二の朗読を終わります。

## 讃歌 (「ハレルヤ／キリスト詠唱」または讃美歌)

ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ。

\* 四旬節、受難週には特に次の詠唱を用いる。

キリストは、へりくだり、死に至るまで、十字架の死に至るまで従順でした。

## 福音書の朗読

朗読者：本日の福音は「書名」〇〇章〇〇節から始まります。

会衆：栄光は主に

朗読者：(朗読) 福音書の朗読を終わります。

会衆：賛美はキリストに

## 説教

## みことばの歌

## 信仰告白

(ニケヤ信条または使徒信条を用いる。)

司式) ニケヤ信条によって、信仰の告白を共にしましょう。

会衆) 天と地、すべての見えるものと見えないものの造り主、全能の父である 唯一の神を私は信じま

す。唯一の主イエス・キリストを私は信じます。主は神のひとり子であって、全ての世に先立っ

て父から生まれ、神の神、光の光、まことの神のまことの神、造られたのではなく、生まれ、父と

同質であって、すべてのものは主によって造られました。主は私たち人間のため、また私たちの救いのために天から下り、聖霊により、おとめマリアから肉体を受けて人となり、ポンテオ・ピラトのもとで私たちのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書のとおり三日目に復活し、天に上られました。そして父の右に座し、栄光のうちに再び来て、生きている人と死んだ人とをさばかれます。その支配は終わることがありません。主であって、いのちを与える聖霊を私は信じます。聖霊は父と子から出て、父と子とともに礼拝され、あがめられます。また、預言者をとおして語られました。唯一の、聖なる、共同の、使徒的な教会を私は信じます。罪の赦しの唯一の洗礼を私は受け入れます。死人の復活と来たるべき世のいのちを待ち望みます。

(アーメン)

司式) 使徒信条によって、信仰の告白を共にしましょう。

会衆) 天地の造り主、全能の父である神を私は信じます。そのひとり子、私たちの主イエス・キリストを私は信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死んで葬られ、陰府に下り、三日目に死人のうちから復活し、天に上られました。そして全能の父である神の右に座し、そこから来て、生きている人と死んだ人とをさばかれます。聖霊を私は信じます。また聖なる共同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、からだの復活と永遠のいのちを信じます。(アーメン)

## 感謝

(ここでシメオンの賛歌を用いてもよい。)

教会の祈り

司式: 祈りましょう。

神さま。私たちは主イエス・キリストによって成し遂げられたあなたの御わざを称えます。あなたは御言葉によって全てのものを創り、イエス・キリストを命の言葉として、この世にお贈りくださいました。この世の智慧では見出すことが出来ない深い憐れみと愛に感謝します。

司式: 恵みの神さま。あなたの御言葉から受けた恵みに応え、私たちは心を合わせ、父なる神であるあなたに祈ります。私たちの祈りを、聞き届けてください。

(諸祈祷)

# 司式者または他の祈祷者はその日に必要な祈りを祈る。  
教会、福音の宣教、平和と正義、貧困、抑圧、孤独、癒し、和解、その日の特別な事柄等

司式：・・・各項目の祈りの最後を「キリストのみ名により」で結ぶ

会衆：「主よ、聞いてください」または「主よ、憐れんでください」で応答する。

### 結びの祈り

司式：恵みの神さま。

あなたの憐れみに信頼し、私たちのすべての祈りを委ねます。私たちの救い主、イエス・キリストによって祈ります。

会衆：アーメン。

### 主の祈り

一同：天におられるわたしたちの父よ、  
み名が聖とされますように。  
み国が来ますように。  
みところが天に行われるとおりに  
地にも行われますように。  
わたしたちの日ごとの糧を  
今日もお与えください。  
わたしたちの罪をおゆるしてください。  
わたしたちも人をゆるします。  
わたしたちを誘惑に陥らせず、  
悪からお救いください。  
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。  
アーメン

天の父よ。  
み名があがめられますように。  
み国が来ますように。  
み心が天で行われるように、  
地上でも行われますように。  
私たちに今日もこの日の糧を  
お与えください。  
私たちに罪を犯した者を赦しましたから、  
私たちの犯した罪をお赦してください。  
私たちを誘惑から導き出して、  
悪からお救いください。  
み国も力も栄光も ところしえにあなた  
のものだからです。  
アーメン

・NCC 統一訳 (1971 年)

## 派遣

### 感謝の捧げもの

### 派遣の祈り

司式：世界の創り主、全能の神様。

イエス・キリストにより、私たちを一つの体として結び合わせてくださり感謝いたします。

わたし きぼう にんたい ゆうき りんじん あい いま ささげ  
私たちが希望と忍耐と勇気で満ち、隣人を愛することができるようにしてください。今 捧げ  
られたものがあなたを あかし ひとびと とど いた かな ひとびと りんじん  
証し、世界の人々に届けられますように。痛み悲しむ人々の隣人として、  
わたし せいれい おく だ しゅ みな いの  
私たちが聖霊によって送り出してください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。

会衆：アーメン。

## 派遣の歌

(ここでシメオンの賛歌を用いてもよい。)

## 祝福

しゅ しゅくふく まも  
司式：主があなたを祝福し、あなたを守られるよ  
うに。(一守られます)

しゅ みかお む て  
主が御顔を向けてあなたを照らし、あなた  
めぐ あた あた  
に恵みを与えられるように。(一与えられま  
す)

しゅ みかお む へいあん  
主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を  
たまわ たま  
賜るように。(一賜わります)

ちち こ せいれい みな  
父と子と聖霊の御名によって。

会衆：アーメン。

しゅ めぐ かみ あい  
司式：主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、  
せいれい まじ いちどう とも  
聖霊の交わりが、あなたがた一同と共に  
あるように。

会衆：アーメン。

## 派遣の言葉

い しゅ へいわ  
司式：行きましょう。主の平和のうちに。

つか しゅ りんじん  
仕えましょう。主と隣人に。

わたし い  
会衆：(アーメン) 私たちは行きます。

かみ たす  
神の助けによって。

い しゅ へいわ  
司式：行きましょう。主の平和のうちに。

つか しゅ りんじん  
仕えましょう。主と隣人に。

わたし わ あ めぐ  
会衆：私たちは分かち合います、恵みを。

つた ふくいん  
伝えます、福音を。

## <補記>

### シメオンの賛歌

いまわたし しゅ すく み  
一同：今私は 主の救いを見ました。

しゅ やす さ  
主よ あなたはみことばのとおり しもべを 安らかに 去らせてくださいます。

これは すべての民に 備えられた 救い

しょこくみん こころ ひかり み たみ えいこう  
\*諸国民の心を ひらく光、御民イスラエルの 栄光です。

ひと もち  
\*「すべての人」を用いることもできる



## 式文委員会

平岡仁子（長）

中島康文

松本義宣

浅野直樹

石居基夫

安井宣生（2018・3迄）

多田 哲（2018・4～）

## ルーテル共同式文検討委員

檜木芳昭（日本ルーテル教団）

白井真樹（日本ルーテル教団）

アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）協力

アドヴァイザー

Gordon W. Lathrop

主日礼拝式文試用版

ハンドブック～解説と実践